

日本語の音韻と旋律の関係について

著者	堤 彩香
内容記述	筑波大学修士（図書館情報学）学位論文・平成27年3月25日授与（34301号）
学位授与年度	2014
URL	http://hdl.handle.net/2241/00138385

日本語の音韻と旋律の関係について

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2015年3月

堤 彩香

目次

第1章	はじめに	1
第2章	基本事項	3
2.1	日本語における拍 [1]	3
2.2	アクセント [2] [3]	3
第3章	先行研究	5
3.1	歌謡の旋律とアクセント [4] [5]	6
3.2	歌謡曲の旋律における歌詞のアクセントと旋律の関係 [6]	10
3.3	本研究との関連	11
第4章	研究環境	13
第5章	新明解日本語アクセント辞典 [1]	13
第6章	使用楽曲	15
第7章	分析方法	22
7.1	MIDI ノート番号 [9]	22
7.2	アクセントとメロディの対応	22
7.3	歌詞の扱い	23
第8章	結果1：アクセント変化部でのメロディ	27
8.1	表の見方	27
8.2	童謡	28
8.3	唱歌	31
8.4	演歌	33
第9章	結果2：語全体でのメロディ	36
9.1	語全体でのアクセントとメロディの一致	36
9.2	アクセント型とメロディの条件	37
9.3	表の見方	38
9.4	童謡	39
9.5	唱歌	43
9.6	演歌	47
第10章	考察	51
第11章	今後の課題	53
	謝辞	54
	参考文献	55

目次

図 1 : アクセントの型.....	3
図 2 : 名詞のアクセント型.....	4
図 3 : 早春賦のアクセントと旋律.....	7
図 4 : 「雨降りお月さん」のアクセントと旋律.....	8
図 5 : 「島の娘」の旋律.....	9
図 6 : 「雨」と「霧」の楽曲中での音程変化.....	11
図 7 : 歌の始めの「雨」と「霧」の音程変化.....	11
図 8 : 童謡「あかとんぼ」のアクセント.....	16
図 9 : 鍵盤と MIDI ノート番号の対応.....	22
図 10 : アクセントとメロディの対応.....	23
図 11 : 童謡「かわいいかくれんぼ」の歌詞の分割.....	24
図 12 : アクセント型の変化.....	24
図 13 : 音高列・音程列.....	25
図 14 : 撥音・長音の例.....	25
図 15 : 重複の例.....	26
図 16 : 表の見方(童謡 2 拍語).....	27
図 17 : 平板型のアクセントとメロディ.....	36
図 18 : 頭高型のアクセントとメロディ.....	37
図 19 : 表の見方(唱歌 3 拍語).....	38

表目次

表 1: 「雨」と「霧」の楽曲中での音程変化 [7].....	11
表 2: 歌の始めの「雨」と「霧」の音程変化 [7].....	11
表 3-1: 使用した童謡 1	17
表 4-1: 使用した唱歌 1	19
表 5: 使用した演歌.....	21
表 6: 拍数ごとのサンプル数(童謡).....	29
表 7: 童謡 2~5 拍語の調査結果	30
表 8: アクセント変化部の完全一致度と不一致度(童謡)	31
表 9: 拍数ごとのサンプル数(唱歌).....	31
表 10: 唱歌 2~5 拍語の調査結果	32
表 11: アクセント変化部の完全一致度と不一致度(唱歌)	33
表 12: 拍数ごとのサンプル数(演歌).....	33
表 13: 演歌 2~5 拍語の調査結果	34
表 14: アクセント変化部の完全一致度と不一致度(演歌)	35
表 15: 童謡 3 拍語.....	39
表 16: 童謡 4 拍語.....	40
表 17: 童謡 5 拍語①	41
表 18: 童謡 5 拍語②	42
表 19: 唱歌 3 拍語.....	43
表 20: 唱歌 4 拍語.....	44
表 21: 唱歌 5 拍語①	45
表 22: 唱歌 5 拍語②	46
表 23: 演歌 3 拍語.....	47
表 24: 演歌 4 拍語.....	48
表 25: 演歌 5 拍語①	49
表 26: 演歌 5 拍語②	50
表 27: 童謡・唱歌・演歌のアクセント変化部一致率	51

第1章 はじめに

日本語には高低のアクセントが存在する。「雨」と「飴」、「橋」と「箸」のように、読みは同じでも意味が違う語は高低のアクセントの位置によって判別される。日本語では、通常の会話において、例えば「わたしは〇〇が好きだけど、あなたはどうですか？」や、「〇〇をしたい。けれども△△もしたい」などのように、ある部分を強く言う場合もある。しかし、これは感情を込めて・強調して言うような場合であるので、単語自体にここを強く発音するという決まりは無い。つまり、日本語は高低の違いで語の意味が区別される高低アクセントの言語であり、英語やドイツ語などのような一つ一つの単語について強く発音する部分が定まっている強弱アクセントの言語とは異なる。

また、アクセントには地域差があり、標準語と異なるアクセントを持つ地方も多く存在する。例えば、標準語で「傘が」と発音する際アクセントは「かさ^が」となるが、鹿児島では「かさ^が」または「かさ^が」となる。標準語と方言どちらのアクセントでも通じるが、方言の場合には、聴き手に「方言を聞いている」という意識が存在すると考えている。

それでは日本語の詞を持つ楽曲ではどうなのだろうか。歌詞の場合、そのメロディによって詞に高低が与えられる。楽曲を聴く際、詞も一つの重要な要素であると考えているが、この詞がメロディに影響を与えることはないのだろうか。日本語のような高低アクセントの言語は、言葉自体が上がって・下がってといった簡単なメロディを持つと言える。強弱アクセントであれば、言葉がリズムを持つと考えられる。そこで、日本語の歌詞をもつ歌において、アクセントはメロディと関わっているのか・関わっているのであればどの程度かと疑問に思った。

私たちが普段耳にする楽曲の多くは日本語の歌詞を用いたものであろう。数回聴いて歌詞が聞き取れる曲もあれば、なかなか聞き取りにくい曲もあり、歌詞を覚えやすい曲もあればそうではない曲もある。歌の自然さ・歌いやすさには、テンポの速さ、メロディやリズムの複雑さ、歌詞の内容や複雑さなど、様々な要因が考えられる。例えば跳躍進行の多いメロディは、順次進行中心のメロディより一般には歌いにくい。メロディは難しくなくとも、早口でなければ曲に間に合わないといった詞も一般には歌いにくい部類となるだろう。それとともに、メロディや歌詞単独での性質だけでなく、それらの間の関係や相互作用も重要である。その1つとして、メロディの自然なグルーピングによる切れ目と、歌詞の単語・文節による区切りとが一致しているかがあげられる。J-POP では両者の不一致がよく指摘されるが、伝統的な曲でもそのような例はある。例えば唱歌「君が代」は、「さざれ石の」という歌詞がメロディによって「さざれ／石の」と区切られている。これとともに、メロディの音高の高低と、歌詞の音韻の抑揚との関係もあげられる。本研究ではこのメロディと詞のアクセントの高低の関係を対象として取り上げる。

メロディと詞のアクセントの高低の関係とはどういうことか。例えば、わらべ歌や民謡のような生活に密着して生まれてきた歌は、日常的な発声や音韻を踏まえ、さらに口承で伝えられてきたことから、歌詞とメロディが密接に結びつき、自然で歌いやすいと考えられる。これらの曲や旧来の歌謡曲などに対し、いわゆる J-POP をはじめとする現在の曲では、歌詞とメロディの関係が希薄になっているとされている。そのことの是非はさておき、その結果として歌詞が聞き取りにくい、(特に年長者には)歌いにくいといったことにつながりうる。また、人間がどのように詞と旋律を結び付けて作曲するかを調査することは、言葉を使って自動作曲を行う場合、大きな手がかりともなる。

以下、第 2 章で本研究における基本事項、第 3 章で先行研究について説明し、第 4 章で研究環境、第 5 章で使用した辞典、第 6 章で調査楽曲に付いて説明した後、第 7 章で分析方法、第 8・9・10 章でその結果と考察を示す。

第2章 基本事項

2.1 日本語における拍 [1]

日本語でいう拍とは、一定の時間的長さを持った音の文節単位である。音韻論ではモーラと呼ばれるもので、簡単に言えば、大体カナ 1 文字で書かれる音のことである。例えば、ア・イ・ウ・エ・オはそれぞれ 1 拍(1 モーラ)であり、「うみ」「おか」など 2 文字の言葉なら 2 拍語(2 モーラ)、「おとな」「たまご」など 3 文字の言葉なら 3 拍語と呼ぶ。つまり n 文字の言葉なら n 拍語となる。引き音(ー)や、撥音(ン)、促音(ッ)も 1 拍として数えるが、キャ、キュ、キョなどの拗音はそれぞれ一文字分の長さで発音されるので、カナ 2 文字で 1 拍と数える。つまり、「てん」は 2 拍語、「とーすと」は 4 拍語、「あっち」は 3 拍語、「りょうしん」や「きょうかい」は 4 拍語となる。

2.2 アクセント [2] [3]

アクセントという語はさまざまに使われているが、「日本語のアクセント」という時の標準的な使い方としては、「個々の語について定まっている高低の配置」という意味である [4]。例えば、「箸」はシを低くいう、「橋」はシを高くいう、というものである。ただし、この高い・低い差は、音楽で言う半音三つ分や四つ分というように高さの間隔が厳密に決まっているというわけではなく、ただ上がっているか下がっているかの大きなものである。つまり、全ての語は、低い部分と高い部分に分けられるため、アクセントの型というものはごく少数しかない。基本的には図 1 に示す 4 種類に分けられる(図 1)。

頭高型	最初の音が高く、それ以降は低い
	からす らいばる あいさつ
中高型	最初の音は低く、次以降の音が高くなり、単語の終わりまでにまた低くなる
	たまご ほごしゃ おるごーる
尾高型	最初の音は低く、次以降の音は高いが、後に続く助詞が低くなる
	もの おとこ めいしよ
平板型	最初の音が低く、次以降の音は助詞も含めて高くなる
	かえで さくら しょうねん

図 1: アクセントの型

頭高型(あたまだけがた)は「からす」「らいばる」「あいさつ」のように最初の音が高く、2 拍目以降は低いという型である。中高型(なかだだけがた)は「たまご」「ほごしゃ」「おるごーる」のように、最初の音は低く、2 拍目で高くなり、語の終わりまでに再び低くなる。尾

高型(おだかがた)は「もので」「おとこ(が)」「めいしよに」のように、最初の音は低く、2 拍目以降の音は高いが、その後続く助詞で音が低くなる。最後に、平板型(へいばんがた)は、「かえて」「さくら」「しょうねん」のように、最初の音が低く、2 拍目以降は高い。尾高型と異なり、平板型は後続の助詞も含めて 2 拍目以降の音が高くなるため、「かえて(が)」「さくら(を)」となる。

頭高型、中高型、尾高型、平板型と 4 種類の型を紹介したが、中高型の場合、さらにとの位置で高→低と下がるかにより細分されるので、拍数別のアクセント型は図 2 になる。

名 詞 の 型 一 覧 表

第 1 表

拍数の種類		一拍の語	二拍の語	三拍の語	四拍の語	五拍の語	六拍の語
平板式	平板型	●▽ ヒ(が) 日(が)	●●▽ トリ(が) 鳥(が)	●●●▽ サクラ(が) 桜(が)	●●●●▽ トモダチ(が) 友達(が)	●●●●●▽ トナリムラ(が) 隣村(が)	●●●●●●▽ ムラサキイロ(が) 紫 色(が)
	尾高型		●●▽ ハナ(が) 花(が)	●●●▽ オトコ(が) 男(が)	●●●●▽ イモート(が) 妹(が)	●●●●●▽ オショウガツ(が) お正月(が)	●●●●●●▽ ジュイチガツ(が) 十一月(が)
起伏式	中高型			●●●▽ ココロ(が) 心(が)	●●●●▽ ミズウミ(が) 湖(が)	●●●●●▽ ワタシブネ(が) 渡し船(が)	●●●●●●▽ アイアイガサ(が) 相合傘(が)
					●●●●▽ ウグイス(が) 鶯(が)	●●●●●▽ ナツヤスミ(が) 夏休み(が)	●●●●●●▽ コドモココロ(が) 子供心(が)
	頭高型					●●●●●▽ オナイドシ(が) 古い年(が)	●●●●●●▽ シンガンセン(が) 新幹線(が)
							●●●●●●▽ オマワリサン(が) お巡りさん(が)

注 ●は名詞の一拍を、▽は助詞の一拍を表す。

図 2 : 名詞のアクセント型 [4](pp18-19)

図 2 では、各拍の高低を●の位置によって図形的に示している。各列末尾の▽印は、名詞の末尾に助詞が付いた場合の高低を示す。本文中では、●の位置で各拍の高低を表す代わりに、●を低い音、○を高い音としてアクセントの高低を表すことにする。例えば、2 拍語平板型なら●○、3 拍語中高型なら●○●、4 拍語頭高型なら○●●●というように表し、助詞が必要な場合は●○○(●)と括弧の中に助詞のアクセントを記す。

図 2 の 4 拍語の列に注目すると、平板型は●○○○(○)、尾高型は●○○○(●)、頭高型は○●●●(●)とそれぞれ 1 つずつなのに対し、中高型は●○○●(●)と●○●●(●)の 2 つとなっていることが分かる。同様に見ていくと、5 拍語では中高型が 3 つ、6 拍語では 4 つとなっている。語数が増えるにつれて中高型の数も増えるので、平板・尾高・中高・頭高型全てを足したアクセント型の数は、1 拍語で 2 つ、2 拍語で 3 つ、3 拍語で 4 つ、4 拍語で 5 つとなり、n 拍語では n+1 つのアクセント型が存在することになる。

第3章 先行研究

メロディと歌詞の音程関係については、とりわけ不一致の場合に個別の事例として述べられることが多い。メロディと歌詞の音程の不一致について、エラー! 参照元が見つかりません。を例にして説明する。

①  :不一致
 アクセント

②  :一致
 バイオリン

図 3: メロディと歌詞の一致・不一致

「アクセント」は 5 拍語の頭高型であり、言葉のピッチはア↘クと「ア」から「ク」の間で下がる。例①では、語のピッチが「ア」から「ク」で下がるのに対し、メロディがドからレへ上がっており、語のピッチとメロディが合っていない。つまり、メロディと歌詞の音程が不一致である、と言える。一方、例②では、「バイオリン」は 5 拍語平板型で、言葉のピッチはバ↑イと「バ」から「イ」の間で上がる。メロディも同じようにドからレへと上がっているため、例②はメロディと歌詞の音程が一致していると言える。

音程の不一致でよく取り上げられる例として、「赤とんぼ」と「蛍の光」がある。図 4 は童謡「赤とんぼ」と唱歌「蛍の光」の楽譜で、楽譜の上に歌詞と歌詞の標準アクセント(赤い線で表記)を載せている。「赤とんぼ」では「夕焼け小焼けの赤とんぼ」の「あか」の部分、「蛍の光」では冒頭の「ほたる」が音程不一致となっている。

赤とんぼ(作詞:三木露風, 作曲:山田耕筰)

ゆうやけこやけの あかとんぼ



ゆうやけこやけの あかとんぼ

蛍の光(作詞:稲垣千穎)

ほたるの ひかり



ほた る の ひかり

図 4: 「赤とんぼ」と「蛍の光」[参考文献番号]〇

本研究では、アクセント型をもとに歌詞を分類して、メロディと歌詞の音程関係の調査を行う。

メロディと歌詞の関係进行调查した先行研究は、例えば、

- 「暗い」を「cry」と発音するように、日本語を英語のように歌っている
- 「おなじな／ーみーだ／がキラリ／ー」というように、歌詞とメロディの区切りが一致していないと高年齢層には歌いにくい、といった考察
- 共通語アクセントとメロディの音程の一致・不一致

があるが、これらは特定の曲名をあげて、「このような例がある」と列挙しているものが多い。本章では、このうち2例を紹介する。まず、3.1節では、①楽曲をジャンルごとに分類して特徴进行调查を行っていること、②本研究で基礎となる調査方法を用いていることから、歌詞を文章として扱いメロディと歌詞の音程関係を調査した金田一の研究を挙げる。3.2節では、ジャンルは様々であるが、特定の単語に限定して多くの楽曲からアクセントとメロディの関係を調査している点から、「雨」「霧」という特定の単語に限定して同様の調査を行った高木の研究を紹介する。

3.1 歌謡の旋律とアクセント [5] [6]

金田一は、楽曲を洋楽系統(唱歌、童謡・歌曲、流行歌・新民謡、翻案・翻訳歌謡)、邦楽系統(わらべ歌、端唄・俗曲、長唄・箏歌、浄瑠璃、琵琶歌その他語り物、謡曲)に分類し、それぞれの具体例について、旋律にアクセントがどの程度考慮されているかを調査した。

楽曲を歌詞を見ずに聴いたとき、まれに歌詞を誤認することがある。これは日本語のアクセントが高低アクセントであることから来る事実である。言葉のアクセントが歌謡の旋律と密接な関係を持っているために、もとの歌詞のアクセントを生かすか殺すかということは、歌詞の意味をよく伝えるかどうかについて大きな力を持っているのだ。これは欧米の歌謡に対する日本の歌謡の大きな特徴になる。

以下では金田一の研究のうち、いろいろな歌謡について、その旋律にアクセントがどの程度考慮されているかについて調査した結果のうち、本研究に関係のある洋楽系統4ジャンルについて説明する。

① 唱歌の類について

唱歌は、学校で教えるために作られた曲を中心とするもので、内容はいずれも真面目、歌詞は文語か文語に近い日本語である。旋律の形式は整然としており、旋法はおおむね西洋風の長音階または短音階による。この種の唱歌の旋律は、おおむね歌詞のアクセントとは無関係に出来ている。

例えば、吉丸一昌作詞・中田章作曲の「早春賦」では、歌詞のアクセントが「はるはなのみのかぜのさむさや」であるのに対し、旋律は「はるはなのみのかぜのさむさや」となっており、最後の「さむさや」以外アクセントと旋律の動きは異なる。

(図5)。



歌詞： はるは なのみの かぜの さむさや

旋律： はるは なのみの かぜの さむさや

図 5：早春賦のアクセントと旋律

土井晩翠作詞・滝廉太郎作曲の「荒城の月」や内田元作曲の「日章旗を仰いで」も同様に、アクセントと旋律の動きは合っていない。このように、学校唱歌は一般にアクセントを重んじていないが、「朝顔」や「富士山」、「虹」など一部の楽曲では東京アクセントを考慮に入れた旋律がつけられている。また、時に京都・大阪のアクセントに従って旋律を付けたものが見られることも注意したい。

唱歌の中には、学校唱歌の他に軍歌・行進曲・校歌も含み、これらも多くがアクセントを重んじていない。ただし、この中で山田耕筰や信時紉の作曲のものはアクセントがよく整っている点で異彩を放っている。

② 童謡・歌曲の類について

ここでは子供向きの楽曲を童謡、大人向きの楽曲を歌曲と呼ぶ。唱歌と異なって題材は自由で、もっと芸術的であり、歌詞は概ね口語である。形式も自由で、旋律は洋風のものが多いが、日本風の陽旋法・陰旋法というべきものも存在する。

この類は洋楽ジャンルの中でもっともアクセントに従った旋律をもっており、本居長世・中山晋平・山田耕筰・藤井清水・橋本國彦・近衛秀麿・宮原禎次・大中寅二たちはいずれもアクセントに即した旋律を作曲している。例えば北原白秋作詞・山田耕筰作曲の「からたちの花」は、1番・2番と歌詞が異なるのに合わせ、アクセントに応じた旋律が付けられている。

同じく北原白秋作詞・山田耕筰作曲の「ひがん花」「風」、川路柳虹作詞・山田耕筰作曲の「青い小鳥」「電話」、北原白秋作詞・近衛秀麿作曲の「海の言葉」なども、アクセントによって1番・2番で異なった旋律が付けられている。

童謡・歌曲では、アクセントを重んじた作曲方法が二通りある。一つ目は、アクセントをあくまでも重んじるという方法で、一つ一つの語句の高低変化をそっくり移すというものである。これは、山田耕筰や大中寅二の楽曲に見られる。二つ目は、聞き苦しくならない範囲でアクセントを変えるという方法で、忠実に守っているわけではないがその代りアクセントを生かしてかつ音楽的な流れに乗った楽曲を作るにはどうすればよいか考えられている。例えば、「雨」や「箸」のように○●型の言葉

があるとして、ここにミ・ソと旋律を付けたい場合、そのまま乗せると「飴」や「橋」に聞こえてしまう。そこで、雨のアや橋のハをミで言った後で、声を引いてラへ持っていき、次のソの音へ落とす。このようにすることで、アの最初の音がメより低くても「雨」に聞こえる。中山晋平作曲の「雨降りお月さん」の中の雲の蔭という部分でこの方法が使われている(図 6)。



図 6:「雨降りお月さん」のアクセントと旋律

「かーげ」の部分のみラソとなっており、「か」のミの音を一度ラへ高くし、その後に「げ」でソの音に下げることで「蔭」という言葉に聞こえる旋律となる。図 6 では「あめふり」に前述した「あめ(雨)」という単語が入っているが、この場合、「あめ」と「ふる」が合わさって複合語になることにより、アクセントは「あめ(○●)」から「あめふり(●○●●)」に変わる。また、「あめふり(●○●●)」と「おつきさん(○●●●)」がくっつくことで、発話では「あめふりおつきさん」となる。つまり、図 6 の例では、「かげ」の部分以外のメロディは素直にアクセントを反映している。

次に、ソソミミというような、初めの 2 音が高く並ぶ旋律は、大体●○●●というアクセントの語を連想させる。例えば、「はしには」と「は」と「し」を同じ高さで発音してみると、「橋には」と聞こえて「箸には」には聞こえない。中山晋平作曲の「カッコ鳥」の歌詞「闇夜にゃ」「山から」には、このようなメロディが与えられている。また、日本語は高低アクセントの言語でありながら、その高い音の拍は随伴的に強くも発音される。もし 2 拍の音を同じ高さで話しても、強く発音した方が高い音に聞こえるのだ。これを生かし、今示したソソミミのような高高低低型の旋律を、○●●●というアクセントの語に当てることができる。これは、本居長世作曲の「お山の大将」の歌詞「あとからくるもの」の部分でみられる。

以上のように、童謡・歌曲の類では、アクセントに即した、あるいはアクセントを重んじた旋律が出来ていることが多い。しかし、小松耕輔・梁田貞・弘田竜太郎・成田為三・草川信・松島つねといった作曲家たちの楽曲は、アクセントをあまり考慮に入っていないということもあるように、決して童謡・歌曲の全てがアクセントを尊重しているというわけではない。

③ 流行歌・新民謡の類について

流行歌・新民謡は、童謡・歌曲と同様に大正の中期以後に出来たものであるが、唱歌に対してもっとも対極にあるもので、内容はしばしば教育的でないものもまじり、感傷的な恋愛感情を扱ったものが多い。歌詞は口語を主とし、形式は自由である。

流行歌の旋律の多くはアクセントとの関係は低い。

例えば、長田幹彦作詞・佐々木俊一作曲の「島の娘」の売れ行きは、従来のレコードの記録を破ったと言われているが、この曲の旋律は歌詞のアクセントとはあまり関係がない。



図 7:「島の娘」の旋律 [6]

アクセントは「しまで そだてば むすめ じゅうろく こいごころ」であるのに、旋律は「しまで そだてば むすめ じゅうろく こいごころ」となっている。

また、同様に、サトウ・ハチロー作詞・古賀政男作曲の「ああ、それなのに」、「二人は若い」、藤浦洸作詞・服部良一作曲の「雨のブルース」や、佐藤惣之助作詞・竹岡信幸作曲の「赤城の子守歌」の旋律も、アクセントを無視して作られている。

しかし、その中でも中山晋平や佐々紅華作曲の旋律のように、アクセントに従った旋律は存在する。

一方で、新民謡は「何々小唄」とか「何々節」という類のものであるが、少なくとも1番は大体アクセントに準じて出来ているものが多い。これは作曲者が中山晋平や藤井清水など、アクセントを重んじた作曲をする者であるからだろう。例えば白鳥省吾作詞・中山晋平作曲の「竜峡小唄」などは、よくアクセントを反映した旋律がついている。

④ 翻案・翻訳歌謡の類について

外国由来の楽曲のうち、「蛍の光」や「庭の千草」のように新しく日本語の歌詞を作ってあてはめて歌う楽曲が翻案歌謡であり、「オーソレミオ」や「野ばら」のように外国の歌詞の意味を日本語に訳してその旋律で歌う楽曲が翻訳歌謡である。

この種の歌謡は題材は極めて広範囲であり、歌詞の多くは文語であるが、口語のものも存在する。形式は唱歌に似て整ったものが多く、旋法は西洋風である。大きな特徴として、旋律が先にあって歌詞は後から作られる。

「蛍の光」「庭の千草」「旅愁」「グノーのセレナーデ」などで見られるように、この種の楽曲ではアクセントを無視することが多い。

以上より、どのようにアクセントを反映しているかは、楽曲の種類によって異なり、非

常に忠実なものから、全く無視しているものまで千差万別であることが分かる。ここで紹介したのは洋楽系統のみであるが、邦楽系統も含めると、全般としてアクセントを守ろうとするものが多いように思える。中には過去においてはアクセントに忠実であったものの、現在はその旋律が歌詞のアクセントに忠実では無くなったものも存在した。これは、日本語の中には時代によって異なるアクセントを持つ語があることが影響している。一方で、前の時代には旋律がアクセントに忠実でなかったものの、改良して忠実な旋律を付け替えようとした楽曲も幾つか存在したことが分かった。

3.2 歌謡曲の旋律における歌詞のアクセントと旋律の関係 [7]

高木は、3.1 節で述べた金田一の研究の中で分類されたジャンルのうち、流行歌・新民謡の類に相当する歌謡曲について、歌詞中の「雨」と「霧」に焦点を当て、アクセントと旋律とが合っているのか、あるいは時代による変化が見られるのかの調査を行った。

調査の対象として「雨」と「霧」を選んだのは、1. ともに気象現象を表し歌謡曲に頻出する語であり、歌詞の中で似た使われ方をすること、2. 雨と霧は対照的なアクセントを持ち、アクセント変化が逆になれば意味変わる語であること(雨(あめ)⇔飴(あめ)、霧(きり)⇔錐(きり))が理由である。調査の資料として『全音 歌謡曲大全集』全 7 巻を使用した。収載している曲数は以下のとおりである。

第 1 巻	480 曲	明治 17 年	～昭和 22 年上
第 2 巻	472 曲	昭和 22 年下	～昭和 34 年上 (12 年分)
第 3 巻	475 曲	昭和 34 年下	～昭和 43 年上 (9 年分)
第 4 巻	478 曲	昭和 43 年下	～昭和 51 年上 (8 年分)
第 5 巻	447 曲	昭和 51 年下	～昭和 56 年上 (5 年分)
第 6 巻	425 曲	昭和 56 年下	～昭和 61 年上 (5 年分)
第 7 巻	411 曲	昭和 61 年下	～平成 3 年上 (5 年分)

統計は、以下の方法で行った。

- 「雨」に対して二つの音符(つまり「あ」に一つの音符、「め」にもう一つの音符)が
あてられているものについて、二つの音符を比較
- 音が上がるものを「上昇」、同じ音が続くものを「同音」、音が下がるものを「下降」
と分類
- 三つ以上の音符があてられている場合は「その他」
- 1 曲の中で「雨」という語が繰り返し使われている場合、あてられている旋律の音程
やリズムが異なる時は別のものとして数える(「霧」の場合も同様)

なお、外国の曲に日本語の歌詞をつけたものや、「こぬか雨」「通り雨」「夜霧」等の複合語は統計から除外した。

結果は表 1 である。結果を見る際の問題点として、第 1 巻の対象とする時代が広すぎる
ことや、時代が下がるにつれて収録歌数が増加すること、数は多くないが方言で書かれて
いる歌詞も統計に加えたこと、そして作詞家・作曲家の出身地によっては共通語と異なる
アクセントを意識して作られた可能性も皆無ではないことが挙げられる。

アクセントを考えると「雨」には下降音型、「霧」には上昇音型が望ましい。ところが表
1 を見ると、「霧」では比較的アクセントが尊重されているものの、「雨」ではほとんど配慮

表 1: 「雨」と「霧」の楽曲中での音程変化 [7]

〈雨〉					〈霧〉				
	上昇	同音	下降	その他		上昇	同音	下降	その他
1 卷	18	21	11	24	1 卷	5	3	1	8
2 卷	19	23	19	26	2 卷	14	7	9	13
3 卷	14	24	18	13	3 卷	12	5	8	7
4 卷	25	16	27	10	4 卷	6	2	3	3
5 卷	23	22	28	7	5 卷	4	4	0	1
6 卷	15	23	13	7	6 卷	3	4	2	0
7 卷	17	24	14	6	7 卷	0	2	2	1

されていないように見える。

また、楽曲においてメロディのどの位置に詞があるかも関係すると考え、歌の始めに現れる「雨」と「霧」に限定し、同様に調査を行った(表 2)。

表 2: 歌の始めの「雨」と「霧」の音程変化 [7]

	上昇	同音	下降	その他
雨	30%	43%	18%	10%
霧	52%	17%	4%	26%

歌謡曲は上昇(または同音)音型で始まり下降音型で終わることが多い。また、「雨」や「霧」が歌詞の終わりに来る歌は少ない。つまり、「雨」や「霧」の語が歌詞の始めに多くおかれ、終わりにおかれることが少なければ、結果として表 1、表 2 のように「霧」のアクセントは生かされ、「雨」のアクセントが軽視されることになるのだ。これより、表 1 の結果は偶然による部分が大きいように思う。

しかし、アクセントがほとんど無視されているわけでもなく、歌の冒頭に現れる「雨」と「霧」を比較するだけでも、アクセントを意識して作られた歌が存在することが分かる。「雨」について言うならば、4 卷 5 卷において下降音型で歌われる箇所が比較的多くなっていることから、その時代(昭和 43 年～昭和 56 年)の作詞家・作曲家がアクセントを意識する場面が多かったと考えられる。

3.3 本研究との関連

3.1 節で述べた金田一の研究ではメロディと歌詞の音程関係を、歌詞を文章として見ることによって調査を行っている。その結果、ジャンルごとのアクセントの扱いの大まかな傾向や、アクセントを崩さないメロディはどのようなものが存在するかが分かった。3.2 節の高木の研究では「雨」「霧」という具体的な語に対して調査し、アクセントとの一致に関する結果は

偶然による部分が大きいように感じるというものだったが、特定の時代で作詞家・作曲家がアクセントを意識するが多かったことが分かった。

これらをふまえて本研究は、語をアクセント型に分け、高木の手法を使用して調査を行う。また、金田一の研究では、ジャンルごとにいくつ曲を調査したか、アクセントとの一致・不一致はどのくらいであったかは分からないため、そこも含めて調査を行っていく。

第4章 研究方法

4.1 研究環境

楽曲の解析は Windows7 Home Premium 64bit, CPU Core i7 2620M, 4GB のマシンで行なった。グラフの作成には Microsoft Office Excel 2007 を使用した。楽譜からの音列データや歌詞の取り出しは全て手作業で行った。

4.2 新明解日本語アクセント辞典 [4]

アクセントの調査には新明解日本語アクセント辞典第二版を使用した。

初版が発行された 2001 年から、2014 年の第二版発行までの十余年の間に、インターネットの普及をはじめ日本語を取り巻く環境は大きく変化し、その中で日々新たな言葉が生まれ、アクセントにも新しい傾向が見られるようになった。第二版では、新たに幅広い世代で日常的に使われるようになった言葉などの追加や、新しい傾向として一定の定着をみたと考えられるアクセントの追記が行われた。

東京アクセントと見られるものに焦点を当てており、収録語数は約 1600 語増えて約 76600 語となっている。語の中には二通り以上のアクセントや発音を持つものがあるが、その場合は標準アクセントとして望ましいと思われるものを先にして併記してある。(図 8)

ス,((新は ス)) 巢
スジ,((新は スジ)) 鮨
ノゾム,((新は ノゾム)) 望む,臨む
カキコム,((新は カキコム)) 書き込む
タカイ 高い …… , タカクテ,((新は タカクテ)), ……
オトメ,((古は オトメ)) 乙女
アカトンボ,((古は アカトンボ)) 赤蜻蛉
カミ,((もと カミ)) 神
オモイキル, オモイキル,((古・強は オモイキル)) 思い切る
ナマヤサシイ, ナマヤサシイ,((古・強は ナマヤサシイ)) 生易しい

図 8 : アクセントの注意 [4](p11)

例えば、図 8 の「思い切る」「生易しい」はアクセントが二通り存在し、うち、標準アクセントとして望ましい方は「おもいきる」「なまやさしい」となっている。中には、若い世

代の使うアクセントも大量に取り入れてあり、高年層では使わないような外来語の平板型も「新は」として記載してある。これは図 8 中の「巢」や「鮭」、「望む」、「書き込む」、「高くて」に見られる。同時に高年層の使用する古めかしいアクセントも、「乙女」、「赤とんぼ」、「神」に見られるように、「古は」「もとは」と記してある。これらは、あくまでも相対的な異なりであり、一定の年代を示すものではない。

巻末付録として、様々なアクセントの法則も載っている。例えば、「つくば+だいがく」→「つくばだいがく」や「て+ひょうし」→「てびょうし」などのような、単語と単語がくっついた場合のアクセント変化の規則や、動詞や形容詞の活用形のアクセント規則、文語の場合や、助詞や助動詞の単語への付き方(体言・用言に付いた場合)などである。

第5章 使用楽曲

本章では、本研究に用いた楽曲について説明をする。使用した楽曲は、童謡、唱歌、そして演歌の3ジャンルである。

まず、童謡とは、子どもの世界を題材に取り、子どもが日常で用いる言葉を使い、子どもの歌唱に適するように作られた歌である。わたべうたが昔から伝承されてきたものであるのに対して、童謡は創作歌謡である。大正から昭和初期にかけて広く創作された。

唱歌とは、童謡と同じく子どもの歌であるが、明治～昭和の初等教育の場において、音楽科の教材として作られた児童歌曲である。

また、演歌は日本の大衆音楽の一種であり、明治16年ごろ、自由民権思想を広めるために当時の荘子たちが演説の代わりに風刺的に歌ったものが初めである。政治からしだいに離れて恋愛を扱ったものが多くなった。

童謡・唱歌を調査するにあたって、「懐かしい童謡唱歌と新童謡」[8]を使用した。こちらは童謡85曲、唱歌94曲が収載されている。このうち本研究では童謡83曲(歌詞が明らかに方言であった「あんたがたどこさ」「童神」の2曲を除く)、唱歌85曲(「数えうた」「児島高德」「金剛石・水は器」「四季の雨」など、文語のためアクセントが不明だったものを除く)の計151曲を使用した(表3-1～表4-2)。演歌は、「演歌名曲大全集」[9]から48曲を使用した(表5)。

表3-1～表5は、本研究で使用した楽曲の一覧である。楽曲名、作詞年、作曲年の順で示しており、続いて、楽曲の歌い出し、注釈を表記している。注釈には、(1)詞が先に作られた(詞先)か曲が先に作られた(曲先)か、(2)原曲が外国で作られ、元の外国語の詞を翻訳した楽曲あるいは新たに日本語の詞が作られた楽曲についてを記している。また、唱歌は明治から昭和にかけて作られた文部省唱歌が多く、明確な作詞・作曲年が分からないため、注釈に記した。


アクセントは地方によって違いが激しいだけではなく、時代や世代によって異なるものがある。そのため、アクセントと楽曲の関係を調査するにあたって楽曲が作られた時代は重要となる。ただし、どの時代に古いアクセントが使用されていたかという明確な線引きは無い。辞書には年代的に新しいアクセント・古いアクセントは載っているものの、一定の年代を示すものではなく、新しい・古いはあくまで相対的な異なりとなっている。

調査するにあたって、古いアクセントであったか、新しいアクセントであったかは結果に影響すると考えた。

例えば、山田耕筰によって作曲された童謡「あかとんぼ」の歌い出し部分「ゆうやけこやけのあかとんぼ」の「あかとんぼ」という語は、現在の標準アクセントで考えると「●○○●●」であり、メロディの高低とは異なる(図9)。本論文の第3章でも、音程不一致がよく挙げられる例の一つとして紹介した。しかし、「好きな歌・嫌いな歌(参考文献)」で團伊玖磨が山田耕筰に「あかとんぼ」のアクセントについて尋ねたところ、作曲された当時(昭和2年)の東京式アクセントは「○●●●●」であったと判明したことから昭和2年の時点では古いアクセントであり、團伊玖磨が書籍を発行した昭和52年には赤とんぼのアクセントは「●○○●●」に変化していたと考えられる。古いアクセントの全てが同時期に変化した

というわけではないが、本研究では「あかとんぼ」の例から、昭和前半までに作られた楽曲は古いアクセントを、昭和後半・平成に作られた楽曲には新しいアクセントを用いて調査を行った。

ゆうやけこやけの あかとんぼ



ゆうやけこやけの あかとんぼ

あかとんぼ = 当時のアクセント

図 9: 童謡「あかとんぼ」のアクセント

表 3-1 : 使用した童謡 1

	曲名	詞	曲	歌い出し	注釈
1	アイアイ	1962	1962	アイアイ アイアイ	
2	青い眼の人形	1921	1922	青い眼をした	詞先
3	赤い靴	1921	1921	赤い靴 はいてた	
4	赤い鳥小鳥	1918	1920	赤い鳥 小鳥	詞先
5	赤とんぼ	1921	1927	夕やけ小やけの	詞先
6	朝はどこから			朝はどこから	
7	あした			お母さま 泣かずに	
8	あの子はたあれ	1939	1941	あの子はたあれ	
9	あの町この町	1924	1924	あの町 この町	
10	雨	1918	1918	雨がふります	
11	あめふり	1925	1925	あめあめ ふれふれ	
12	雨ふりお月	1925	1925	雨降りお月さん	
13	犬のおまわりさん	1960	1960	まいごのまいごの	
14	うさぎ			うさぎ うさぎ	
15	兎のダンス	1924	1926	ソソラ ソソラ	詞先
16	歌の町	1947	1947	よい子が住んでる	
17	うれしいひな祭り	1936	1936	あかりをつけましょ	
18	おうま	1941	1941	おうまの およこは	
19	大きな栗の木の下で			大きな栗の木の下で	
20	おさるのかごや	1938	1938	エッサ エッサ	
21	お正月	1901	1901	もういくつねると	
22	おつかいありさん	1950	1950	あんまりいそいで	
23	おもちゃのチャチャチャ	1959	1959	おもちゃのチャチャチャ	1962年に吉岡治が詞を補作
24	おもちゃのマーチ	1923	1923	やっこやっこ	
25	お山のお猿	1919	1919	お山のお猿は	
26	およげ!たいやきくん	1975	1975	毎日 毎日 ぼくらは	
27	肩たたき	1923	1923	母さん お肩を	
28	かなりや	1918	1919	唄を忘れた 金糸雀は	
29	からすの赤ちゃん	1939	1939	からすの赤ちゃん	曲先
30	かわいいかくれんぼ	1950	1950	ひよこがね	詞先
31	汽車ポッポ	1937	1940	汽車 汽車 ポッポ	詞先
32	汽車ぼっぼ	1927	1927	お山の中行く	
33	北風小僧の寒太郎			北風小僧の寒太郎	
34	切手のないおくりもの			私からあなたへ	
35	きらきらぼし			きらきらひかる	フランスで流行したシャンソン。18世紀末
36	靴が鳴る	1919	1919	お手つないで 野道を	
37	小鳥の歌	1954	1954	小鳥はとっても 歌が	
38	この道	1926	1927	この道はいつか来た道	
39	さくら		1941	さくら さくら	元は江戸時代の琴歌。歌詞を変えた
40	サッチャン	1959	1959	サッチャンはね	
41	里の秋	1945	1945	静かな静かな	
42	しゃぼん玉	1922	1923	しゃぼん玉とんだ	
43	さんぽ			あるこう あるこう	

表 3-2 : 使用した童謡 2

	曲名	詞	曲	歌い出し	注釈
45	証城寺の狸囃子			証 証 証城寺	
46	砂山	1922	1922	海は荒海 向こうは	
47	背くらべ	1922	1922	柱のきずは おとしの	一番だけ歌詞が先 二番以降は曲が先
48	ぞうさん	1951	1952	ぞうさん ぞうさん	詞先
49	たきび	1941	1941	かきねの かきねの	
50	だんご三兄弟	1999	1999	串にささって だんご	
51	小さい秋みつけた			誰かさんが 誰かさんが	
52	チューリップ	1932	1932	さいた さいた	
53	月の砂漠	1923	1923	月の砂漠を はるばると	詞先
54	手のひらを太陽に			ぼくらはみんな生きている	
55	手をたたきましよう	1952	1952	手をたたきましよう	原曲はチェコ民謡(?)
56	てるてる坊主	1921	1922	てるてる坊主 てる坊主	詞先
57	とけいのうた			コチコチ カッチン	
58	どこかで春が	1923	1923	どこかで春が 生まれてる	
59	どんぐりころころ	1921	1921	どんぐりころころ	
60	とんでったバナナ			バナナがいつぽん	
61	とんぼのめがね			とんぼの めがねは	
62	七つの子			烏なぜ泣くの 烏は山に	
63	花嫁人形	1923	1925	きんらんどんすの	詞先
64	春よこい	1923	1923	春よ来い 早く来い	
65	ひょうたんぼっくりこ			いも虫 ごろごろ	
66	ひらいたひらいた			ひらいた ひらいた	江戸後期にはすでに存在
67	ぶらんこ			ぶらんこゆれて	
68	ペチカ			雪の降る夜は	
69	マーチングマーチ	1965	1965	マーチったら チツカカタ	
70	待ちぼうけ	1924	1924	待ちぼうけ 待ちぼうけ	
71	真っ赤な秋			まっかだな まっかだな	
72	まつぼっくり			まつぼっくりが あったとき	
73	みかんの花咲く丘	1946	1946	みかんの花が 咲いている	詞先
74	みどりのそよ風			みどりのそよ風 いい日だね	
75	めだかの学校	1950	1950	めだかの学校は 川のなか	詞先
76	もずが枯木で			もずが枯木に泣いている	
77	森のくまさん			ある日 森のなか くまさんに	
78	森の小人	1941	1947	森の木陰で ドンジャラホイ	詞先
79	山羊さんゆうびん			白やぎさんから お手紙	
80	山の音楽家			わたしや音楽家	
81	夕焼小焼			夕焼小焼で 日が暮れて	
82	雪の降るまちを	1952	1952	雪の降る町を	一連だけの詞に曲を付け、その後2・3連も制作
83	りんごのひとりごと	1940	1940	私は真っ赤な りんごです	詞先

表 4-1：使用した唱歌 1

	曲名	詞	曲	歌い出し	注釈
1	仰げば尊し	1884	1884	あおげば 尊し	曲先。アメリカで作られた曲
2	青葉			雨がやむ 雲が散る	
3	朝			朝は再び ここにあり	
4	あさがお			毎朝 毎朝 咲く朝顔は	
5	朝だ元気で			朝だ朝だよ 朝日が	
6	池の鯉			出てこい出てこい 池の鯉	
7	一月一日	1893	1893	年の始めの 例とて	1893に作られたが、1913に歌詞を改作
8	一番星みつけた			一番星みつけた あれあの	
9	一寸法師	1905	1905	指に足りない一寸法師	
10	いなかの四季			道をはさんで 畠一面に	
11	犬	1911	1911	外へ出るとき とんで来て	
12	うぐいす			うめの小枝で うぐいすは	
13	うさぎとかめ	1901	1901	もしもし かめよ かめさんよ	
14	牛若丸	1911	1911	京の五条の橋の上	
15	うちの子ねこ			うちの子ねこは かわいい	
16	美しき天然	1905	1905	空にさえずる鳥の声	楽譜の出版年。歌自体はもっと前から存在
17	うみ			うみは ひろいな 大きいな	
18	海	1913	1913	松原遠く消ゆるところ	
19	浦島太郎	1911	1911	昔昔 浦島は 助けた亀に	
20	おおえやま	1901	1901	むかし丹波の 大江山	
21	おきゃがりこぼし			投げ出されて ころころ転び	
22	朧月夜	1914	1914	菜の花畠に 入り日薄れ	
23	案山子	1911	1911	山田の中の一本足の案山子	
24	かたつむり	1911	1911	でんでん虫々 かたつむり	
25	鎌倉	1910	1910	七里が浜の磯伝い	
26	烏			かあかあ 烏がないて行く	
27	菅公			日かげさえぎる むら雲に	
28	汽車	1912	1912	今は山中 今は浜	
29	金魚			赤い大きな鱭ゆらゆらと	
30	きんたろう	1900	1900	まさかりかたついで きんたろう	
31	こいのぼり	1931	1931	屋根より たかい こいのぼり	
32	鯉のぼり	1913	1913	薨の波と雲の波	
33	荒城の月	1898	1898	春高樓の花の宴	詞先。曲は一般公募
34	子馬	1910	1910	はいしい はいしい	詞先。尋常小学読本の韻文教材に曲を付けた
35	昭和の子供			昭和 昭和 昭和の子供よ	
36	スキー	1943	1943	山は白銀 朝日を浴びて	
37	早春賦	1913	1913	春は名のみ風の寒さや	
38	曾我兄弟			富士の裾野の 夜はふけて	
39	大こくさま			おおきなふくろを	
40	田植			白い菅笠 赤だすき	
41	たこのうた			たこたこあがれ	
42	たなばたさま	1941	1941	ささの葉さらさら	
43	茶摘	1912	1912	夏も近づく 八十八夜	
44	蝶々	1881		ちょうちょう ちょうちょう	曲先。1881～1884の小学唱歌集。日本と西洋の合作

表 4-2 : 使用した唱歌 2

	曲名	詞	曲	歌い出し	注釈
45	月	1910	1911	出た出た 月が	詞先。尋常小学読本の韻文教材に曲を付けた
46	電車ごっこ	1932	1932	運転手は君だ 車掌は僕だ	
47	動物園			動物園ののどかな午後は	
48	時計の歌			時計は朝から かつちん	
49	とんび	1918	1918	とべ とべ とんび 空高く	詞先
50	那須与一			源平勝負の晴の場所	
51	夏の思い出	1949	1949	夏がくれば 思い出す	詞先
52	夏は来ぬ	1900	1900	卯の花の 匂う垣根に	
53	二宮金次郎			柴刈り 縄ない 草鞋を	
54	庭の千草			庭の千草も 虫の音も	曲先。アイルランド民謡
55	人形			わたしの人形はよい人形	
56	野菊	1942	1942	遠い山から吹いて来る	
57	鳩	1911	1911	ぽっぽぽ 鳩ぽっぽ	
58	花	1900	1900	春のうららの隅田川	
59	はなさかじい	1901	1901	うらのはたけで ぼちがなく	
60	花の街			七色の谷を越えて	
61	花火	1934	1941	どんとなった 花火だ	詞先
62	殖生の宿	1889	1889	殖生の宿も わが宿	曲先。イングランド民謡
63	浜辺の歌	1913	1913	あした浜辺を さ迷えば	詞先
64	春がきた	1903	1910	春が来た 春が来た	詞先。尋常小学読本の教材に曲を付けた
65	春風			吹け そよそよ吹け 春風よ	
66	春の小川	1912	1912	春の小川は さらさら行くよ	
67	日の丸の旗			白地に 赤く 日の丸 染めて	
68	雲雀			びいびいびいと 囀る雲雀	
69	鶴越			鹿も四つ足 馬も四つ足	
70	富士山	1910	1911	あたまを雲の上に出し	詞先
71	冬景色	1913	1913	さ霧消ゆる湊江の	
72	冬の夜	1912	1912	燈火ちかく衣縫う母は	
73	故郷	1914	1914	兎追いしかの山	
74	僕の弟			僕のおとうと 五郎ちゃん	
75	蛍			蛍のやどは 川ばた楊	
76	蛍の光			蛍の光 窓の雪	曲先。スコットランド民謡
77	牧場の朝	1932	1932	ただ一面に立ちこめた	
78	港	1900	1900	空も港も夜ははれて	
79	虫のこえ	1909	1910	あれ 松虫が鳴いている	詞先。尋常小学読本の韻文教材に曲を付けた
80	村の鍛冶屋			しばしも休まず つち打つ	
81	村祭	1912	1912	村の鎮守の神様の	
82	紅葉	1911	1911	秋の夕日に照る山紅葉	
83	桃太郎		1911	桃太郎さん 桃太郎さん	元は読み物
84	雪	1911	1911	雪やこんこ 霰やこんこ	
85	夢			金の自動車に飛乗ると	
86	我は海の子	1910	1910	我は海の子 白波の	

表 5 : 使用した演歌

	曲名	詞	曲	歌い出し	注釈
1	ああ上野駅	1964	1964	どこかに故郷の 香りを	
2	愛燦燦	1986	1986	雨 燦燦と この身に	
3	哀愁の湖	2008	2008	白樺の林 抜ければ	
4	愛人	1985	1985	あなたが好きだから	
5	愛の終着駅	1977	1977	寒い夜汽車で 膝を	
6	愛のままで	2008	2008	小鳥たちは 何を騒ぐの	
7	赤いグラス	1965	1965	唇寄せれば なぜか	
8	赤いハンカチ	1962	1962	アカシヤの 花の下で	
9	アカシヤの雨がやむとき	1960	1960	アカシヤの 雨にうたれて	
10	熱き心に	1985	1985	北国の 旅の空	
11	ああ人生に涙あり	1969	1969	人生楽ありや 苦もあるさ	
12	天城越え	1986	1986	隠しきれない 移り香が	
13	あまやどり	2005	2005	やりたいことも あるだろに	
14	雨夜酒	1991	1991	あなたが消えた 雨の中	
15	アメリカ橋	1998	1998	風が足もとを 通り過ぎて	
16	逢わずに愛して	1969	1969	涙枯れても 夢よ枯れるな	
17	アンコ橋は恋の花	1964	1964	三日おくれの 便りを	
18	粋な別れ	1967	1967	生命に 終わりがあ	
19	居酒屋	1982	1982	もしもきらいで なかったら	
20	石狩挽歌	1975	1975	海猫が鳴くから ニシンが	
21	潮来笠	1960	1960	潮来の伊太郎 ちょっと	
22	凍て鶴	2008	2008	北の酒場で 飲む酒は	
23	命くれぬ	1986	1986	生れる前から 結ばれて	
24	祝い酒	1988	1988	浮世荒波 ヨイショと越える	
25	浮雲ふたり	2003	2003	浮雲みたいに このまま	
26	うしろ姿	1969	1969	帰っちゃいやと いえない	
27	うすゆき草	2005	2005	同じ歩幅で これからも	
28	ウナ・セラ・ディ東京	1963	1963	哀しいことも ないのに	
29	海雪	2008	2008	凍える空から 海に降る	
30	襟裳岬	1974	1974	北の街ではもう 悲しみを	
31	王将	1961	1961	吹けば飛ぶよな 将棋の	
32	大井追っかけ音次郎	2001	2001	渡る雁 東の空に 俺の	
33	おーい 中村君	1958	1958	おーい 中村君 ちよいと	
34	大阪しぐれ	1980	1980	ひとりで 生きてくなんて	
35	奥飛驒慕情	1980	1980	風の噂に 一人来て	
36	お座敷小唄	1964	1964	富士の高嶺に 降る雪も	
37	小樽のひとよ	1967	1967	逢いたい気持が ままならぬ	
38	男と女のラブゲーム	1986	1986	飲みすぎたのは あなたの	
39	男はつらいよ	1968	1968	俺がいたんじゃ お嫁にや	
40	お富さん	1954	1954	粋な黒塚 見越しの松に	
41	お久しぶりね	1983	1983	お久しぶりね あなたに会う	
42	おひまなら来てね	1961	1961	おひまなら来てよネ 私	
43	おふくろさん	1971	1971	おふくろさんよ おふくろさん	
44	おまえに	1966	1966	そばにいてくれる だけでいい	
45	おもいで酒	1979	1979	無理して飲んじゃ いけないと	
46	おゆき	1976	1976	持って生まれた 運命まで	
47	俺は待ってるぜ	1957	1957	霧が流れて むせぶよな波止場	
48	女のみち	1972	1972	私がささげた その人に	

第6章 分析方法

本章では、アクセントに基づいたメロディの分析の方法について説明する。メロディを数値化して扱うため、音高の表示には MIDI ノート番号を使用する。そこで、まず 7.1 節で MIDI ノート番号を説明し、7.2 節でアクセントとメロディの対応条件、7.3 節で歌詞の扱いを説明する。

6.1 MIDI ノート番号 [10]

MIDI とは Musical Instrument Digital Interface の頭文字を組み合わせた言葉で、楽器演奏の要素となる大きさ、長さ、音色や効果などを数値化した、演奏情報を伝達するための世界共通の規格である。MIDI ノート番号は演奏情報の一つで、音階のド・レ・ミ…に相当する音の高さを、半音ずつ低いものから順に半音単位で 0~127 の番号に割り当てて表したものである。例えば、ピアノの場合、中央ハの音が MIDI ノート番号の 60 となる。(図 10) また、中央ハから始まるハ長調の音階(図 10 の白鍵)の MIDI ノート番号は、60、62、64、65、67、69、71、(72、74、…)となる。

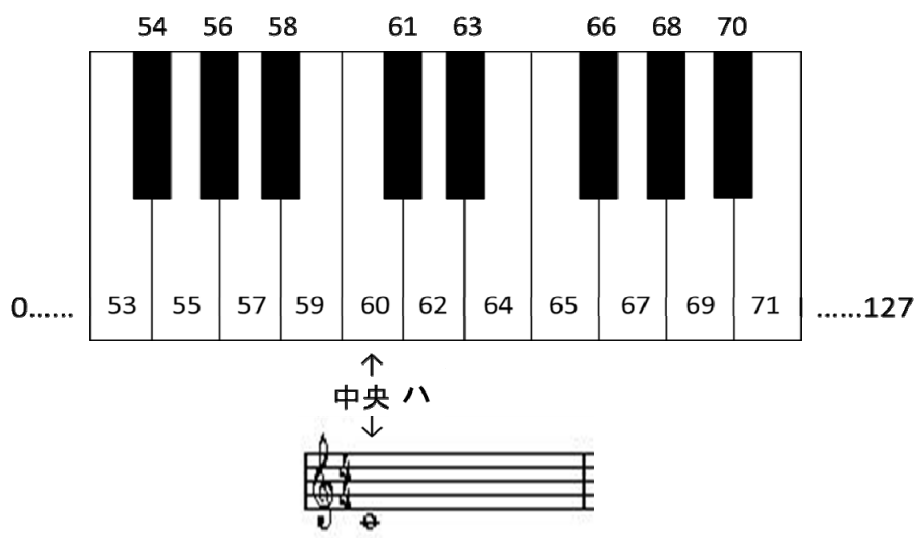


図 10 : 鍵盤と MIDI ノート番号の対応

6.2 アクセントとメロディの対応

アクセントの高低とメロディの対応条件は以下とした(図 11)。

- ① アクセントが上がる場合：通常発話時、「はこ」のように一音目と二音目でアクセント

が上がる場合は、「は」から「こ」の音へ移動する際メロディの音程は上がる、または変わらなければ音程一致(図 11①)

- ② アクセントの高低が変わらない場合：通常発話時、「か[↑]え[↑]で」の「え[↑]で」のように一音目と二音目で音の高さが変わらない場合は、「か」から「え」の音へ移動する際メロディの音程は上下同音どの音へ移動しても音程一致(図 11②)
- ③ アクセントが下がる場合：通常発話時、「[↓]か[↓]ア」のように一音目と二音目で音の高さが下がる場合は、「ド」から「ア」の音へ移動する際メロディの音程は下がる、または変わらなければ音程一致(図 11③)

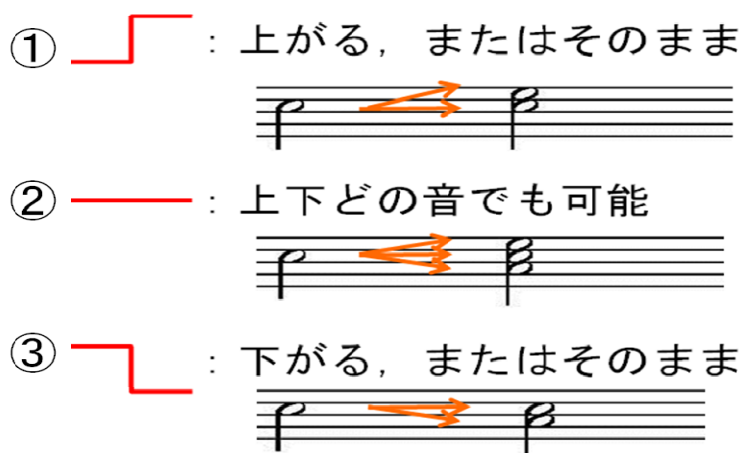


図 11：アクセントとメロディの対応

これに対し、上を満たさないものを「音程不一致」と呼ぶ。音程不一致となるのはアクセントの音程とメロディの音程の上がる／下がるが逆転している場合である。

6.3 歌詞の扱い

分析では、アクセントを調査し歌詞を区切り、各語とメロディの対応付けを行う。これにあたり、歌詞の分割と対応付けの条件を示す。

(1) 歌詞の区切り

日本語では先行する名詞等との組み合わせによって後続の助詞・助動詞のアクセントが変化する。そのため、歌詞は「どんなに／じょうずに／かくれても／きいろい／あんよが／みえてるよ」のように文節単位で区切る(図 12)。

区切った歌詞は、図 12 のように、「どんなに」「あんよが」は 4 拍語の頭高型、「じょうずに」は 4 拍語中高型、「かくれても」は 5 拍語中高型、「きいろい」は 4 拍語平板型、「みえてるよ」は 5 拍語頭高型と、拍数とアクセント型を使って分類を行った。

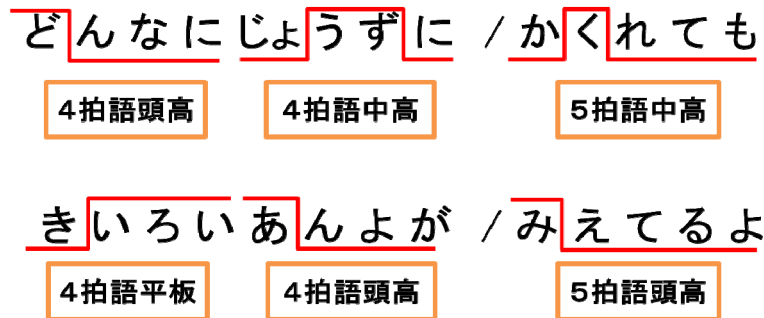


図 12 : 童謡「かわいいかくれんぼ」の歌詞の分割

歌詞を区切る際、「でてこい」「あるきはじめる」等の動詞と動詞が結合した接合動詞・結合動詞や、「てびょうし」「まどがらす」等の名詞と名詞が結合した癒合名詞・結合名詞は、結合したもののアクセントを使用した(図 13)。

しかし、「日の出」や「火の粉」など、助詞「の」「が」で名詞が接続された場合や、「飛ぶ鳥」「青い空」「きいろいあんよ」のように先行する用言と後続の名詞が結びついた語は、接合名詞としてアクセントが変化するが、本研究では接合名詞のアクセントは考慮していない。

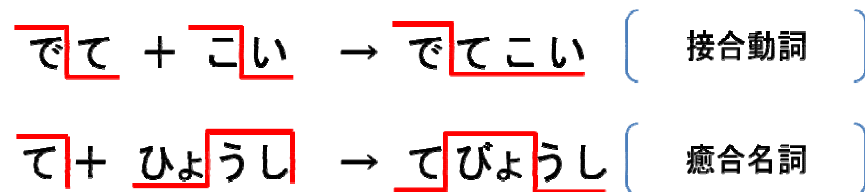


図 13 : アクセント型の変化

(2)言葉とメロディの対応

歌詞の分割後、対応するメロディを MIDI ノート番号で表す。

本研究では、歌詞とメロディの基本的な対応は以下の通りとする。

- ・メロディを MIDI ノート番号で表したものを音高列と呼ぶ
- ・音高列の差分を取ったものを音程列と呼ぶ
- ・1 拍の文字に 2 音以上当てられている場合は 1 音目だけを採用する

例えば、図 14 では歌詞「うたを」の「う」1 拍の部分に 62、65 と音符 2 つが当てられている。この場合は、1 音目だけを採用するので、「う」の音高は 62 となる。つまり、図 14 の「うたを」の部分では音高列が 62、67、65、音程列は差分を取って 0、+5、-2 となる。



図 14: 音高列・音程列

以降、(3)~(4)では、歌詞とメロディの細かな条件について示す。

(3) 撥音、促音、長音の扱い

日本語では、キャ、キュ、キョなどの拗音を含む語はカナ 2 字で 1 拍と数えるが、バン、カッ、オーなどの撥音や促音、長音を含む語は 2 拍として数える。しかし、撥音や促音、長音は楽譜上で 2 つではなく 1 つの音符に 2 拍分が当てられていることがある(図 15)。ここではアクセント辞書の記載に合わせるために、音符を分割して撥音・促音・長音部にも同じ高さの音が割り当てられているとして音符数と拍数を合わせる。例えば図 15 では「どん」、「じょう」はいずれも音符 2 個に分割されるものとして扱う。

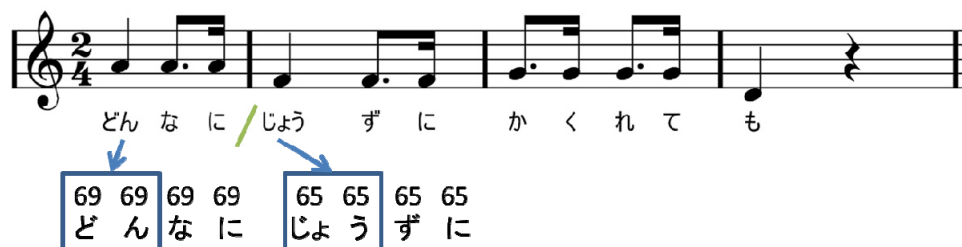


図 15: 撥音・長音の例

(4) 重複の扱い

一曲中では、トークン型集計（出現度数をすべてカウント）ではなく、タイプ型集計（異なり度数：同じものが複数あっても 1 個にカウント）としたため、歌詞（=文節）、音高列がともに等しいものは重複して数えない。歌詞と音高列がともに等しい場合でも、異なる曲である場合は数える。一方、同じ歌詞でも音高列が異なるものは異なるタイプとして扱った。

図 16 の例だと①と②は共に音高列が 65、67、69、音程列が 0、+2、+2 であるため重複となり②は数に入れない。①と③の場合、音程列は 0、+2、+2 と同じであるものの①の音高列は 65、67、69、③の音高列は 60、62、64 で異なっているため異なるタイプとして扱う。つまり、ただ移調しただけの場合も音高列が異なるため異なるタイプとなる。

第7章 結果 1 : アクセント変化部でのメロディ

本章では第 7 章で説明した方法を使った楽曲の分析のうち、アクセント変化部のみに注目した結果を説明する。調査範囲は 6 章で挙げた楽曲の 1 番部分であり、2 番以降の調査は行っていない。演歌の場合は、基本的には 1 コーラスだが、2 番のサビ終了後、大サビに入る前に 1 番中で出なかった新たなメロディが出てくる場合は、その新たなメロディも調査の対象としている。

調査結果は表の形で示すため、まず 8.1 節で表の見方を説明した後に、8.2 節で童謡、8.3 節で唱歌、8.4 節で演歌の結果を示す。

7.1 表の見方

調査結果は図 17 のような表の形で示しており、単語や文節のアクセント型に対し、対応するメロディの音程変化の割合を表している。

2拍語		一拍	二拍
●○(平)			
上	40.0%		
変化なし	28.9%		
下	31.1%		
個数: 45			
●○(尾)			
上	55.6%		
変化なし	11.1%		
下	33.3%		
個数: 18			
○●(頭)			
上	17.6%		
変化なし	36.5%		
下	45.9%		
個数: 74			

一拍目と二拍目の間で音高がどのように変化したか

●: 低い音 } を表しており、
○: 高い音 }

(平)は平板型、(尾)は尾高型、
(中)は中高型、(頭)は頭高型
を表している

図 17 : 表の見方(童謡 2 拍語)

例えば図 17 上段は 2 拍語の平板型で、●○のように、1 拍目から 2 拍目で低→高のように音高が上がる。その下には対応するメロディの音程による分類があり、「上」は上昇（低→高）、「変化なし」は同音の反復、「下」は下降（高→低）を表す。

本章では、メロディとアクセントの一致を次のように定義する。

- アクセント変化部でアクセントと同じようにメロディが変化しているものを完全一致
- アクセント変化部でアクセントと同じ・または同音へメロディが変化しているものを一致
- アクセント変化部でアクセントに逆らったメロディ変化をしているものを不一致

図 18 は 2 拍語頭高型「こい(鯉)」にメロディをあてた例である。鯉は「こ」と「い」の間でピッチが下がるが、①のように、メロディが下がってれば完全一致、②のように、メロディが下がっているもの・同音であったものを合わせて一致、③のように、メロディがアクセント変化と逆であった(この場合はメロディが上がった)ものを不一致と呼ぶ。

例えば、頭高型「こい」の場合、

① : 完全一致

② : 一致

③ : 不一致

図 18 : アクセントとメロディの条件

図 17 中の色のついたセルは、音韻の音程とメロディの音程が「完全一致」であったものを表す。

図 17 の平板型の場合、集計個数 45 個のうち、メロディも音韻と同じく低→高と変化したものは 40%、メロディが同音のもの 29%、音韻と逆にメロディが高→低と下がるもの 31%である。変化なしの場合も音程一致として扱えば、この例では音程一致 69%、音程不一致 31% で、不一致が約 1/3 あることになる。3 拍目以降がある場合は同じ形式で表を右側に広げていく。

7.2 童謡

童謡は、2 拍語(「花」「今」「見て」など)から 8 拍語(「おにんぎょうさんが」「ゆうやけこやけの」「きたかぜこぞうの」)があり、各拍数・アクセント型ごとのサンプルの数は表 6 である。

表 6：拍数ごとのサンプル数(童謡)

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語
平板	45	115	127	41	3	2	3
尾高	18	9	3	9	1	0	0
中高1		52	58	18	3	1	0
中高2			48	39	1	2	0
中高3				9	3	2	0
中高4					6	6	3
中高5						3	1
中高6							0
頭高	74	76	95	36	3	2	0
合計	137	252	331	152	20	18	7

表 6 は縦軸がアクセント型、横軸が拍数となっており、アクセント型は平板型を平板、尾高型を尾高、中高型を中高、頭高型を頭高と表示している。例えば 2 拍語の平板型(●○)のサンプル数は 45、3 拍語の頭高型(○●●)のサンプル数は 76 となる。また、中高型は中高 1、中高 2、中高 3 と後ろに数字が付いているが、これは高い拍(○)の数となっており、例えば 3 拍語の中高 1 であれば●○●を、4 拍語の中高 1 であれば●○●●を表す。同様に、4 拍語の中高 2 は●○○●、6 拍語の中高 3 は●○○○●●となる。以後、唱歌・演歌も各拍数のサンプル数は表 6 と同様の表で示す。

表 6 を見てみると、8 拍語の中高 5 や 7 拍語の中高 1 のサンプル数が 1 と少ない一方で、4 拍語の平板のサンプル数が 127、3 拍語の平板が 115 と、サンプル数には偏りがあることが分かる。拍数が増えるほどサンプル数が少なくなるため、ここでは 2～5 拍語の結果を示す。

童謡の 2～5 拍語の調査結果は表 7 である。表 7 を見てみると、アクセント変化とメロディ変化の完全一致は 2 拍語平板型が 40.0%、頭高型が 45.9%、3 拍語平板型が 40.0%、中高型 1 は上昇部分が 42.3%、下降部分が 59.6%と、それほど高い結果ではないように感じる。しかし、変化なし(同音)の割合も多く、2 拍語ではあまりアクセント変化を反映していないように感じるが、3～5 拍語では不一致の割合が低くなっている。例えば、不一致の割合は、3 拍語平板型では 13.0%、4 拍語中高型 1 では上昇部分で 5.2%、12.1%である。

表 7：童謡 2～5 拍語の調査結果

2拍語				3拍語			
●○(平)				●○○(平)			
上	40.0%			上	40.0%	33.0%	
変化なし	28.9%			変化なし	47.0%	33.0%	
下	31.1%			下	13.0%	33.9%	
45				115			
●○(尾)				●○○(尾)			
上	55.6%			上	22.2%	44.4%	
変化なし	11.1%			変化なし	66.7%	44.4%	
下	33.3%			下	11.1%	11.1%	
18				9			
○●(頭)				●○●(中1)			
上	17.6%			上	42.3%	23.1%	
変化なし	36.5%			変化なし	34.6%	17.3%	
下	45.9%			下	23.1%	59.6%	
74				52			
				○●●(頭)			
				上			
				15.8%			
				25.0%			
				変化なし			
				26.3%			
				19.7%			
				下			
				57.9%			
				55.3%			
				76			
4拍語				5拍語			
●○○○(平)				●○○○○(平)			
上	36.2%	33.1%	26.0%	上	48.8%	31.7%	36.6%
変化なし	55.1%	31.5%	39.4%	変化なし	48.8%	43.9%	41.5%
下	8.7%	35.4%	34.6%	下	2.4%	24.4%	22.0%
127				41			
●○○○(尾)				●○○○○(尾)			
上	33.3%	33.3%	33.3%	上	22.2%	33.3%	44.4%
変化なし	66.7%	66.7%	0.0%	変化なし	77.8%	44.4%	44.4%
下	0.0%	0.0%	66.7%	下	0.0%	22.2%	11.1%
3				9			
●○●●(中1)				●○●●●(中1)			
上	44.8%	12.1%	22.4%	上	50.0%	16.7%	22.2%
変化なし	50.0%	29.3%	29.3%	変化なし	38.9%	16.7%	33.3%
下	5.2%	58.6%	48.3%	下	11.1%	66.7%	44.4%
58				18			
●○○●(中2)				●○○●●(中2)			
上	39.6%	41.7%	14.6%	上	59.0%	43.6%	2.6%
変化なし	58.3%	35.4%	20.8%	変化なし	38.5%	28.2%	12.8%
下	2.1%	22.9%	64.6%	下	2.6%	28.2%	84.6%
48				39			
○●●●(頭)				●○○○●(中3)			
上	4.2%	25.3%	24.2%	上	44.4%	55.6%	22.2%
変化なし	51.6%	22.1%	43.2%	変化なし	55.6%	33.3%	44.4%
下	44.2%	52.6%	32.6%	下	0.0%	11.1%	33.3%
95				9			
				○●●●●(頭)			
				上			
				16.7%			
				19.4%			
				22.2%			
				50.0%			
				変化なし			
				30.6%			
				13.9%			
				33.3%			
				8.3%			
				下			
				52.8%			
				66.7%			
				44.4%			
				41.7%			
				36			

また、表 7 はアクセント型ごとの結果だが、アクセント変化が上昇する部分(●○)と下降する部分(○●)に分けて一致・不一致度を調査した結果を表 8 に示した。

表 8：アクセント変化部の完全一致度と不一致度(童謡)

	2拍語		3拍語		4拍語		5拍語		全体	
	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部
完全一致度	44.4%	45.9%	39.8%	58.6%	39.0%	53.2%	50.0%	67.6%	42.0%	56.4%
不一致度	31.7%	17.6%	15.9%	18.8%	6.4%	9.0%	3.4%	11.8%	11.3%	13.3%

表 8 は、2～5 拍語のアクセント変化部での上昇・下降別の一致・不一致度を表したものである。アクセント上昇部で、メロディも低→高と変化した場合は、アクセント変化とメロディ変化が一致しているので、完全一致度に加えられる。反対に、メロディが高→低と変化していれば、アクセント変化と一致していないので不一致となる。アクセント変化部でメロディが同音反復だった場合はどちらにも属さない。つまり、2 拍語のアクセント上昇部でメロディも同じように低→高と変化したサンプルは 44.4%であり、4 拍語のアクセント下降部でメロディが低→高と反対に変化したサンプルは 9.0%となる。

表 8 を見ると、完全一致の割合は約 40%以上となっており、全体では上昇部で 42.0%、下降部で 56.4%となっている。一方で、不一致の割合は多いもので 2 拍語上昇部の 31.7%があるものの、大部分が 20%を下回っており、あまり多くない。2～5 拍語全体での不一致の割合は、上昇部で 11.3%、下降部で 13.3%と低くなっている。全体を通してみると、アクセント変化のある部分で、およそ半分がアクセントと完全一致のメロディ進行をしており、不一致のメロディ進行が少ないことが分かった。

7.3 唱歌

唱歌は、2 拍語(「風」「増す」「夜(よ)は」など)から 8 拍語(「おきゃがりこぼしは」「なのはなばたけに」)があり、各拍数・アクセント型ごとのサンプルの数は表 9 である。

表 9：拍数ごとのサンプル数(唱歌)

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語
平板	37	128	110	33	2	3	0
尾高	37	17	3	1	0	0	0
中高1		98	75	18	0	2	0
中高2			64	39	3	5	0
中高3				17	2	8	0
中高4					1	5	4
中高5						5	0
中高6							0
頭高	98	134	83	18	1	2	0
合計	172	377	335	126	9	30	4

唱歌も 6~8 拍語はサンプルの数が少ないため、2~5 拍語の結果を表 10 に示す。

表 10：唱歌 2~5 拍語の調査結果

2拍語				3拍語			
●○(平)				●○○(平)			
上	37.8%			上	49.2%	30.5%	
変化なし	29.7%			変化なし	38.3%	19.5%	
下	32.4%			下	12.5%	50.0%	
37				128			
●○(尾)				●○○(尾)			
上	62.2%			上	52.9%	29.4%	
変化なし	21.6%			変化なし	29.4%	29.4%	
下	16.2%			下	17.6%	41.2%	
37				17			
○●(頭)				●○●(中)			
上	12.2%			上	55.1%	26.5%	
変化なし	28.6%			変化なし	30.6%	12.2%	
下	59.2%			下	14.3%	61.2%	
98				98			
				○●●(頭)			
				上	20.1%	23.1%	
				変化なし	29.9%	16.4%	
				下	50.0%	60.4%	
				134			

4拍語				5拍語			
●○○○(平)				●○○○○(平)			
上	35.5%	29.1%	20.0%	上	48.5%	39.4%	18.2%
変化なし	58.2%	32.7%	36.4%	変化なし	42.4%	18.2%	45.5%
下	6.4%	38.2%	43.6%	下	9.1%	42.4%	36.4%
110				33			
●○○○(尾)				●○○○○(尾)			
上	66.7%	0.0%	0.0%	上	0.0%	0.0%	100.0%
変化なし	33.3%	0.0%	33.3%	変化なし	100.0%	100.0%	0.0%
下	0.0%	100.0%	66.7%	下	0.0%	0.0%	0.0%
3				1			
●○●●(中)				●○●●●(中1)			
上	34.7%	22.7%	16.0%	上	22.2%	16.7%	33.3%
変化なし	48.0%	20.0%	28.0%	変化なし	55.6%	16.7%	16.7%
下	17.3%	57.3%	56.0%	下	22.2%	66.7%	50.0%
75				18			
●○○●(中)				●○○●●(中2)			
上	45.3%	39.1%	7.8%	上	33.3%	51.3%	15.4%
変化なし	45.3%	37.5%	39.1%	変化なし	53.8%	15.4%	28.2%
下	9.4%	23.4%	53.1%	下	12.8%	33.3%	56.4%
64				39			
○●●●(頭)				●○○○●(中3)			
上	16.9%	24.1%	22.9%	上	41.2%	41.2%	29.4%
変化なし	45.8%	31.3%	36.1%	変化なし	52.9%	23.5%	35.3%
下	37.3%	44.6%	41.0%	下	5.9%	35.3%	35.3%
83				17			
				○●●●●(頭)			
				上	27.8%	27.8%	27.8%
				変化なし	44.4%	5.6%	22.2%
				下	27.8%	66.7%	50.0%
				18			

表 10 を見ると、アクセント変化部での完全一致の割合は、童謡とさほど変わらない結果であることが分かる。アクセント変化部での完全一致・不一致の割合は表 11 の結果で、童謡と比較すると 2、3 拍語では完全一致の割合が高く不一致の割合も小さいものの、4、5 拍語では上昇部での完全一致が少なめとなっている。しかし、表 10 を見ると、4、5 拍では 1-2 拍間での同音反復が多いことが分かる。2-3 拍間以降での下降アクセント部では同音反復の割合が少なくなっているが、1-2 拍間で下降する頭高型でも同音反復の割合が 4 拍語で 45.8%、44.4%と高めになっていることと、不一致の割合は低いことから、作曲するにあたって 4 拍以上の語において 1-2 拍間のアクセントはさほど重要視されていないと考えられる。

表 11：アクセント変化部の完全一致度と不一致度(唱歌)

	2拍語		3拍語		4拍語		5拍語		全体	
	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部
完全一致度	50.0%	59.2%	51.9%	54.7%	38.1%	48.6%	37.0%	55.4%	44.2%	53.4%
不一致度	24.3%	12.2%	13.6%	22.8%	10.3%	16.2%	12.0%	19.6%	13.3%	18.5%

また、表 11 より、全体の上昇・下降部での完全一致・不一致の割合は童謡とあまり変わらず、サンプルの約半分がアクセント変化と完全一致のメロディ変化をしており、不一致の割合は小さい。

7.4 演歌

演歌は、2 拍語(「雨」「待つ」「く(苦)も」など)から 11 拍語(「燃やしはじめてるらしい」)とあり、各拍数・アクセント型ごとのサンプルの数は表 12 である。

表 12：拍数ごとのサンプル数(演歌)

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語	11拍語
平板	48	135	123	39	3	4	1	0	0	0
尾高	8	9	2	0	0	1	0	0	0	0
中高1		85	75	26	1	2	0	0	0	0
中高2			50	40	3	7	0	0	0	0
中高3				18	9	11	0	0	0	0
中高4					1	12	3	1	0	1
中高5						2	1	0	0	0
中高6							0	0	0	0
中高7								0	1	0
中高8									0	0
中高9										0
頭高	64	105	74	26	7	8	0	0	0	0
合計	120	334	324	149	24	47	5	1	1	1

童謡・唱歌と同じように、2～5 拍語の調査結果を表 13 に示した。

表 13：演歌 2～5 拍語の調査結果

2拍語				3拍語				
●○(平)				●○○(平)				
上	52.1%			上	37.8%	40.7%		
変化なし	14.6%			変化なし	37.0%	27.4%		
下	33.3%			下	25.2%	31.9%		
48				135				
●○(尾)				●○○(尾)				
上	37.5%			上	55.6%	22.2%		
変化なし	12.5%			変化なし	33.3%	11.1%		
下	50.0%			下	11.1%	66.7%		
8				9				
○●(頭)				●○●(中)				
上	29.7%			上	31.8%	35.3%		
変化なし	21.9%			変化なし	41.2%	30.6%		
下	48.4%			下	27.1%	34.1%		
64				85				
				○●●(頭)				
				上				
				27.6%				
				43.8%				
				変化なし				
				37.1%				
				21.0%				
				下				
				35.2%				
				35.2%				
				105				
4拍語				5拍語				
●○○○(平)				●○○○○(平)				
上	32.5%	36.6%	36.6%	上	51.3%	46.2%	38.5%	41.0%
変化なし	46.3%	25.2%	25.2%	変化なし	23.1%	28.2%	12.8%	15.4%
下	21.1%	38.2%	38.2%	下	25.6%	25.6%	46.7%	43.6%
123				39				
●○○○(尾)				●○○○○(尾)				
上	0.0%	50.0%	0.0%	上	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
変化なし	50.0%	0.0%	0.0%	変化なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
下	50.0%	50.0%	100.0%	下	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2				0				
●○●●(中)				●○●●●(中1)				
上	33.3%	25.3%	33.3%	上	30.8%	34.6%	50.0%	46.2%
変化なし	49.3%	25.3%	18.7%	変化なし	34.6%	38.5%	15.4%	3.8%
下	17.3%	49.3%	48.0%	下	34.6%	26.9%	34.6%	50.0%
75				26				
●○○●(中)				●○○●●(中2)				
上	46.0%	32.0%	28.0%	上	30.0%	30.0%	22.5%	52.5%
変化なし	32.0%	20.0%	18.0%	変化なし	47.5%	25.0%	12.5%	5.0%
下	22.0%	48.0%	54.0%	下	22.5%	45.0%	65.0%	42.5%
50				40				
○●●●(頭)				●○○○●(中3)				
上	25.7%	31.1%	27.0%	上	38.9%	33.3%	61.1%	16.7%
変化なし	25.7%	27.0%	24.3%	変化なし	38.9%	44.4%	16.7%	38.9%
下	48.6%	41.9%	48.6%	下	22.2%	22.2%	22.2%	44.4%
74				18				
				○●●●●(頭)				
				上				
				15.4%				
				23.1%				
				42.3%				
				26.9%				
				変化なし				
				38.5%				
				19.2%				
				15.4%				
				7.7%				
				下				
				46.2%				
				57.7%				
				42.3%				
				65.4%				
				26				

表 13 を見ると、童謡や唱歌に比べ、アクセント変化部での完全一致の割合は低めで、40%を下回るものも多い。全拍数・アクセント型を通して不一致の割合も、童謡や唱歌より多めである。完全一致と不一致の割合は表 14 になるが、上昇・下降部共に不一致の割合は30%ほどあり、完全一致も童謡・唱歌ほど高くはない。

表 14：アクセント変化部の完全一致度と不一致度(演歌)

	2拍語		3拍語		4拍語		5拍語		全体	
	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部
完全一致度	50.0%	48.4%	36.2%	34.7%	35.2%	50.3%	38.2%	48.2%	37.4%	44.4%
不一致度	35.7%	29.7%	25.3%	31.1%	20.4%	26.1%	26.0%	22.7%	24.5%	27.5%

第8章 結果 2：語全体でのメロディ

第 8 章では、アクセント変化のある部分に焦点をあてて調査を行った。本章では、アクセント変化のある部分だけではなく、語全体でのアクセントとメロディの一致・不一致の調査を行う。

まず、9.1 節で語全体でのアクセントとメロディの一致とはどういうことかについて、9.2 節で調査の条件を示し、9.3 節で結果の見方について説明した後、9.4 節で調査結果を述べる。

8.1 語全体でのアクセントとメロディの一致

語全体でのアクセントとメロディの一致とはどういうことかについて、平板型の語である「バイオリン」を例にとって説明する(図 19)。

例えば、平板型の語「**バイ**オリン」の場合、




①		①のようなメロディだと、 バイ オリ ン というアクセントに聞こえてしまう
②		②または③のような、 同音または高い音 へのメロディ変化のみであれば、 平板型に聞こえる
③		

図 19：平板型のアクセントとメロディ

平板型の条件は、

- ・ 2 拍目で音高が上がる
- ・ 3 拍目以降で音高が下がることは無い

の二つである。

図 19 の①のようなメロディの場合、「バ」と「イ」の間でメロディが上昇しているため、平板型の特徴である「2 拍目で音高が上がる」という条件は満たす。しかし、「オ」と「リ」

の間でメロディが下降しているため、「2 拍目以降で音高が下がることは無い」という条件は満たさない。2 拍目で音高が上がり、3 拍目以降で下降する条件は中高型であるため、中高型のアクセントに聞こえてしまう可能性がある。

一方、図 19 の②または③のように、2 拍目では上昇し、3 拍目以降は同音または上昇(高い音へのメロディ変化)で構成されたメロディならば、中高型や頭高型には聞こえない。

このように、アクセント変化部だけ高低が一致していても、語全体で見たときに、異なるアクセント型へ聞こえる可能性がある。そのため、本章では語全体を通してアクセントとメロディの一致を見ていく。

8.2 アクセント型とメロディの条件

9.1 節で述べたように、平板型のメロディの条件は、

- ・2 拍目で音高が上がる
- ・3 拍目以降で音高が下がることは無い

の二つである。平板型だと、上昇のアクセント変化しか無いため、9.1 節で述べたように、2 拍目でメロディは上昇、3 拍目以降のメロディは上昇か同音であることが条件となる。

次に、頭高型のアクセントの条件は、

- ・2 拍目で音高が下がる

である。頭高型の語である「おつきさま」を例に説明する(図 20)。

例えば、頭高型「おつきさま」の場合、



おつきさま

①は全て下降のメロディであるため、2拍目で音が低くなる頭高型の条件を満たす。



おつきさま

②は「き」と「さ」の間でメロディが上昇しているが、一度下がったアクセントが再び上がることはないので、3拍目以降にメロディの制約は無い

つまり、2拍目でメロディが下降していれば良い

図 20 : 頭高型のアクセントとメロディ

図 20 の①のような場合は、2 拍目は下降しており、3 拍目以降も全て下降のメロディであるため、頭高型の条件を満たしている。②の場合、2 拍目でメロディは下降しているが、「き」と「さ」の間で上昇している。標準アクセントでは、語の 1 拍目と 2 拍目とで高さ

が異なり、一度下がったアクセントが再び上がることは無い。そのため、頭高型の 3 拍目以降、つまりアクセントの低い部分では、たとえメロディが上がったとしても異なるアクセント型に聞こえることはなく、図 20 の②の例も条件を満たすと考えられる。

以上より、

①アクセント変化のある部分(○●や●○の部分)ではアクセントと同じメロディ変化

②アクセント変化の無い部分では、

—○○ならば、同音か上昇

—●●ならば、下降・同音・上昇どれでも良い

という条件を満たせば、各アクセント型に忠実なメロディ変化となる。

ここから先は、

- ・①②の条件を全て満たしたものを完全一致
- ・①の条件だけ満たしたもの(またはアクセント変化のある部分で同音へ変化したもの)を不完全一致
- ・アクセント変化が 2 か所ある中高型の場合、片方でしか①の条件を満たしていないものを片側一致
- ・①の条件を満たさないものを不一致

と呼ぶ。

8.3 表の見方

調査結果は図 21 のような表で示している。

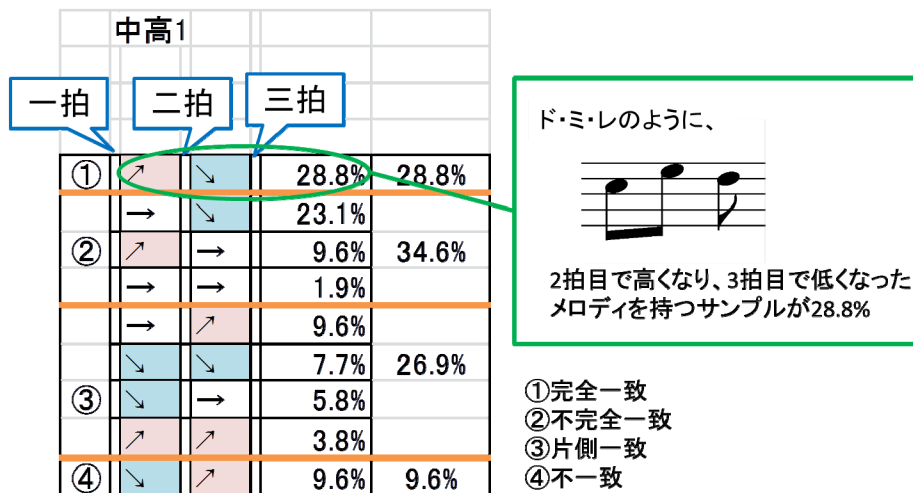


図 21 : 表の見方(唱歌 3 拍語)

例えば、図 21 は 3 拍語中高 1(●○●)の結果で、「ころ」 「おかし」のように 2 拍目で高く、3 拍目で低くなる語である。左端の列は①完全一致、②不完全一致、③片側一致、④不一致と番号付けており、オレンジの線が境界となっている。①を満たすメロディ変化はハの一つであり、②を満たすのは→↘、↗→、→→の三つである。3 拍語中高 1 のうち、ハというメロディ変化をしたサンプルは 28.8%、→↘は 23.1%、↗→は 9.6%、→→は 1.9%であ

る。また、右端の列は①、②、③、④の各メロディ変化の合計であり、②を例にすると、→↘、↗→、→→という不完全一致のメロディ変化の割合が 34.6%存在することを表す。4 拍目以降がある場合は同じ形式で表を右側に広げていく。ただし、5 拍語に限り、②③④のサンプルのうち結果が 0%であるものの表記は省略した。

8.4 童謡

童謡の結果は表 15～表 18 である。アクセント全体とメロディの完全一致は 3 拍語で 34.5%、4 拍語で 29.9%、5 拍語で 31.6%、3～5 拍語全体では 31.8%となった。

表 15：童謡 3 拍語

		平板			
①	↗	↗	13.9%	22.6%	
	↗	→	8.7%		
		→	21.7%		
②	↗	↘	17.4%	64.3%	
	→	↗	14.8%		
	→	↘	10.4%		
		↘	6.1%		
④	↘	↗	4.3%	13.0%	
	↘	→	2.6%		

		中高1			
①	↗	↘	28.8%	28.8%	
	→	↘	23.1%		
②	↗	→	9.6%	34.6%	
	→	→	1.9%		
		→	9.6%		
		↘	7.7%	26.9%	
③	↘	→	5.8%		
	↗	↗	3.8%		
④	↘	↗	9.6%	9.6%	
	↘	→			

		尾高			
①	↗	↗	11.1%	22.2%	
	↗	→	11.1%		
		→	33.3%		
②	→	→	33.3%	66.7%	
	↗	↘	0.0%		
		→	0.0%		
		↘	11.1%		
④	↘	↗	0.0%	11.1%	
	↘	→	0.0%		

		頭高			
		↘	32.9%		
①	↘	↗	13.2%	57.9%	
	↘	→	11.8%		
		→	14.5%		
②	→	→	6.6%	26.3%	
	→	↗	5.3%		
		↗	7.9%		
④	↗	↗	6.6%	15.8%	
	↗	→	1.3%		

表 16：童謡 4 拍語

平板					
①	↗ ↗ ↗			8.7%	22.0%
	↗ ↗ →			7.1%	
	↗ → →			3.9%	
	↗ → ↗			2.4%	
②	→ → ↘			9.4%	69.3%
	↗ ↘ ↘			8.7%	
	→ → →			8.7%	
	→ ↘ →			8.7%	
	→ ↗ →			7.9%	
	→ ↘ ↘			5.5%	
	→ → ↗			4.7%	
	→ ↘ ↗			3.9%	
	→ ↗ ↗			3.1%	
	→ ↗ →			3.1%	
	↗ → ↘			1.6%	
	↗ ↘ ↗			1.6%	
④	↗ ↗ ↘			0.8%	8.7%
	↘ ↘ ↘			3.1%	
	↘ ↘ ↗			2.4%	
	↘ ↘ →			1.6%	
	↘ ↘ →			0.8%	
	↘ ↘ →			0.8%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	

中高1					
①	↗ ↘ ↘			22.4%	34.5%
	↗ ↘ ↗			8.6%	
	↗ ↘ →			3.4%	
	→ ↘ →			13.8%	
②	→ → ↗			10.3%	50.0%
	→ → ↘			8.6%	
	→ ↘ ↘			6.9%	
	↗ → →			5.2%	
	→ → →			5.2%	
	↗ → ↗			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ ↗ →			3.4%	
	↗ ↗ ↗			1.7%	
	↗ ↗ →			1.7%	
	↘ ↘ →			1.7%	
③	→ ↗ ↗			1.7%	13.8%
	↘ ↘ ↘			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
④	↘ ↘ ↗			1.7%	1.7%
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	

頭高					
①	↘ ↘ ↗			10.5%	44.2%
	↘ ↘ ↘			10.5%	
	↘ ↘ →			9.5%	
	↘ ↘ →			6.3%	
	↘ ↘ →			4.2%	
	↘ ↘ →			2.1%	
	↘ ↘ →			1.1%	
	↘ ↘ →			0.0%	
②	→ → ↗			17.9%	51.6%
	→ → →			9.5%	
	→ → →			7.4%	
	→ → ↗			5.3%	
	→ → ↘			4.2%	
	→ → ↗			3.2%	
	→ → ↗			2.1%	
	→ → ↘			2.1%	
	→ → ↗			0.0%	
	↗ ↘ ↗			2.1%	
	↗ ↘ ↘			1.1%	
	↗ ↘ →			1.1%	
④	↗ ↗ ↗			0.0%	4.2%
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ ↗ →			0.0%	

尾高					
①	↗ ↗ ↗			0.0%	0.0%
	↗ ↗ →			0.0%	
	↗ → →			0.0%	
	↗ → ↗			33.3%	
②	→ → ↘			33.3%	100.0%
	→ → ↘			33.3%	
	→ → ↘			33.3%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
④	↘ ↘ ↗			0.0%	0.0%
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	

中高2					
①	↗ ↘ ↘			14.6%	18.8%
	↗ ↘ →			4.2%	
	→ → ↘			22.9%	
	→ → ↗			10.4%	
②	→ → ↘			8.3%	64.6%
	↗ ↘ ↘			6.3%	
	→ ↘ ↘			6.3%	
	↗ → →			4.2%	
	→ → →			4.2%	
	→ → →			2.1%	
	↗ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			0.0%	
	→ → →			4.2%	
	→ ↘ ↗			4.2%	
	↗ ↘ ↗			2.1%	
③	↗ ↘ ↗			2.1%	16.7%
	↘ ↘ ↗			0.0%	
	→ ↗ ↗			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
④	↘ ↘ ↗			0.0%	0.0%
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	
	↘ ↘ →			0.0%	

表 17：童謡 5 拍語①

平板					
	↗	↗	↗	→	4.9%
	↗	→	→	→	4.9%
	↗	→	→	↗	2.4%
①	↗	↗	↗	↗	0.0%
	↗	↗	→	↗	0.0%
	↗	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↗	↗	0.0%
	↗	→	↗	→	0.0%
<hr/>					
	→	→	→	→	17.1%
	↗	↗	↗	↘	9.8%
	→	→	↘	↗	9.8%
	↗	↘	↘	↗	4.9%
	→	↗	↗	↗	4.9%
	→	↗	→	↘	4.9%
	↗	↗	→	↘	2.4%
	↗	↗	↘	↗	2.4%
②	↗	→	→	↘	2.4%
	↗	↘	↗	↗	2.4%
	↗	↘	↗	↘	2.4%
	↗	↘	→	↗	2.4%
	↗	↘	→	↘	2.4%
	↗	↘	↘	↘	2.4%
	→	↗	↗	↘	2.4%
	→	→	↗	↗	2.4%
	→	→	↗	↘	2.4%
	→	→	↘	↘	2.4%
	→	↘	→	→	2.4%
④	↘	↘	↗	↘	2.4%
					2.4%

中高1					
	↗	↘	↗	↗	16.7%
	↗	↘	↘	↗	11.1%
	↗	↘	↗	↘	5.6%
	↗	↘	↘	→	5.6%
①	↗	↘	↘	↘	5.6%
	↗	↘	↗	→	0.0%
	↗	↘	→	↗	0.0%
	↗	↘	→	→	0.0%
	↗	↘	→	↘	0.0%
<hr/>					
	→	↘	→	↘	11.1%
	↗	→	→	↘	5.6%
②	→	→	→	↘	5.6%
	→	→	↘	→	5.6%
	→	↘	↘	↗	5.6%
<hr/>					
	→	↗	↘	↗	5.6%
③	→	↗	↘	↘	5.6%
	↘	↘	→	↘	5.6%
<hr/>					
④	↘	↗	→	→	5.6%
					5.6%

表 18：童謡 5 拍語②

中高2						
	↗	↗	↘	↗	23.1%	
	↗	↗	↘	↘	7.7%	
①	↗	→	↘	↗	5.1%	35.9%
	↗	↗	↘	→	0.0%	
	↗	→	↘	→	0.0%	
	↗	→	↘	↘	0.0%	
	→	→	↘	↘	15.4%	
	↗	↘	↘	↘	10.3%	
	↗	↘	↘	↗	7.7%	
	→	↗	→	↘	5.1%	
②	→	↗	↘	↗	5.1%	59.0%
	→	→	↘	↗	5.1%	
	↗	↘	→	↗	2.6%	
	↗	↘	→	→	2.6%	
	→	→	→	↘	2.6%	
	→	↘	↘	↗	2.6%	
③	→	↗	↗	↗	2.6%	5.1%
	↘	↘	↘	↘	2.6%	
④	↘	↗	↗	↗	0.0%	0.0%

中高3						
	↗	↗	↗	↘	0.0%	
①	↗	↗	→	↘	0.0%	0.0%
	↗	→	↗	↘	0.0%	
	↗	→	→	↘	0.0%	
	→	→	→	↘	22.2%	
	↗	↗	↘	↘	11.1%	
②	↗	→	→	→	11.1%	77.8%
	↗	↘	↘	↘	11.1%	
	→	↗	↗	↘	11.1%	
	→	↗	→	→	11.1%	
③	↗	↗	↘	↗	11.1%	22.2%
	→	↗	↗	↗	11.1%	
④	↘	↘	↘	↗	0.0%	0.0%

頭高						
	↘	↘	↘	↗	13.9%	
	↘	↘	↗	↗	8.3%	
	↘	↘	→	↘	5.6%	
	↘	↗	↘	↗	2.8%	
	↘	↗	↘	↘	2.8%	
	↘	→	↗	↗	2.8%	
	↘	→	↘	→	2.8%	
	↘	→	↘	↘	2.8%	
	↘	↘	↗	↘	2.8%	
	↘	↘	→	↗	2.8%	
①	↘	↘	↘	↘	2.8%	52.8%
	↘	↗	↗	↗	0.0%	
	↘	↗	↗	→	0.0%	
	↘	↗	↗	↘	0.0%	
	↘	↗	→	↗	0.0%	
	↘	↗	→	→	0.0%	
	↘	↗	→	↘	0.0%	
	↘	→	↗	→	0.0%	
	↘	→	↗	↘	0.0%	
	↘	→	→	↗	0.0%	
	↘	→	→	→	0.0%	
	↘	→	→	↘	0.0%	
	↘	→	↘	↗	0.0%	
	↘	↘	↘	→	0.0%	
	→	↘	→	↘	13.9%	
	→	↗	↗	↘	2.8%	
②	→	↗	↘	↘	2.8%	30.6%
	→	→	↗	↘	2.8%	
	→	→	→	↘	2.8%	
	→	↘	→	↗	2.8%	
	→	↘	↘	↗	2.8%	
④	↗	↗	↘	↗	5.6%	16.7%
	↗	↘	↘	↗	5.6%	
	↗	↗	↗	↗	2.8%	
	↗	↘	→	→	2.8%	

8.5 唱歌

唱歌の結果は表 19～表 22 である。アクセント全体とメロディの完全一致は 3 拍語で 36.9%、4 拍語で 21.2%、5 拍語で 11.9%、3～5 拍語全体では 26.8%となった。

表 19：唱歌 3 拍語

		平板					中高1		
①	↗	↗	18.0%	26.6%	↗	↘	34.7%	34.7%	
	↗	→	8.6%		→	↘	16.3%		
	↗	↘	22.7%		↘	↘			
②	→	↘	19.5%	60.9%	↗	→	7.1%	28.6%	
	→	↗	9.4%		→	→	5.1%		
	→	→	9.4%		↗	↗	13.3%		
③	↘	↘	7.8%		↘	↘	10.2%	32.7%	
	↘	↗	3.1%		→	↗	9.2%		
	↘	→	1.6%		↘	→	0.0%		
④	↘	↗			↘	↗	4.1%	4.1%	

		尾高					頭高		
①	↗	↗	17.6%	23.5%	↘	↘	29.9%	50.0%	
	↗	→	5.9%		↘	↗	12.7%		
	↗	↘	29.4%		↘	→	7.5%		
②	→	↗	11.8%	58.8%	→	↘	20.1%	29.9%	
	→	→	11.8%		→	↗	6.0%		
	→	↘	5.9%		→	→	3.7%		
④	↘	→	11.8%	17.6%	↗	↘	10.4%	20.1%	
	↘	↘	5.9%		↗	→	5.2%		
	↘	↗	0.0%		↗	↗	4.5%		

表 20：唱歌 4 拍語

平板				
①	↗	↘	→	9.1%
	↗	↗	↘	2.7%
	↗	→	→	1.8%
	↗	→	↗	0.0%
<hr/>				
②	→	→	↘	10.9%
	→	↘	↘	10.9%
	→	→	→	10.0%
	→	↗	→	9.1%
	↗	↘	↘	8.2%
	↗	→	↘	6.4%
	→	↘	↗	6.4%
	→	↗	↗	4.5%
	↗	↘	↗	3.6%
	→	↘	→	3.6%
	↗	↗	↘	2.7%
	→	→	↗	1.8%
③	↗	↘	→	0.9%
	↘	↘	↘	3.6%
	↘	→	→	1.8%
	↘	↘	↗	0.9%
	↘	↗	↗	0.0%
	↘	↗	↘	0.0%
	↘	→	↗	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	↘	↘	0.0%
	↘	↘	→	0.0%
	↘	↘	↗	0.0%
	↘	↘	→	0.0%

中高1				
①	↗	↘	↘	16.0%
	↗	↘	→	1.3%
	↗	↘	↗	0.0%
	→	↘	↘	16.0%
<hr/>				
②	→	→	→	6.7%
	→	↘	→	6.7%
	↗	→	↘	5.3%
	→	→	↘	5.3%
	→	↘	→	1.3%
	↗	→	↗	0.0%
	→	→	↗	0.0%
	↘	↘	↘	9.3%
	→	↗	→	6.7%
	↗	↗	↗	4.0%
	↗	↗	→	4.0%
	→	↗	↘	2.7%
③	→	→	↗	1.3%
	↘	→	↗	1.3%
	↘	↘	↗	1.3%
	→	↗	↘	0.0%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	↘	↘	0.0%
	↘	↘	↗	2.7%
	↘	↘	↘	1.3%
	↘	↘	↗	0.0%
	↘	↘	→	0.0%
	↘	↘	↗	0.0%
④	↘	↘	↗	1.3%
	↘	↘	↘	4.0%
	↘	↘	→	0.0%
	↘	↘	↗	0.0%

頭高				
①	↘	↘	↘	9.6%
	↘	↗	↗	7.2%
	↘	↗	↘	6.0%
	↘	↘	↗	4.8%
	↘	↘	→	4.8%
	↘	→	→	2.4%
	↘	→	↘	2.4%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↗	0.0%
	→	→	↗	9.6%
	→	↘	↘	9.6%
	→	↘	→	8.4%
②	→	→	↗	4.8%
	→	→	↘	4.8%
	→	→	→	3.6%
	→	↘	↗	2.4%
	→	↘	↘	2.4%
	→	↘	→	0.0%
	↗	→	→	4.8%
	↗	→	↘	3.6%
	↗	→	↗	2.4%
	↗	→	↘	2.4%
	↗	→	→	1.2%
	↗	→	↘	1.2%
④	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%

尾高				
①	↗	↗	↗	0.0%
	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
<hr/>				
②	↗	↘	↘	66.7%
	→	↘	→	33.3%
	↗	↗	↘	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	↘	→	0.0%
	↗	↘	→	0.0%
	→	↗	↗	0.0%
	→	↗	→	0.0%
	→	↗	↘	0.0%
	→	→	↗	0.0%
	→	→	→	0.0%
	→	→	↘	0.0%
③	↗	↘	↘	0.0%
	↗	↘	→	0.0%
	↗	↘	↗	0.0%
	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
④	↗	→	→	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	↘	0.0%

中高2				
①	↗	→	↘	10.9%
	↗	→	→	7.8%
	→	→	→	12.5%
	→	→	↘	10.9%
<hr/>				
②	↗	↘	↘	9.4%
	→	↘	↘	7.8%
	↗	↗	→	6.3%
	→	→	→	6.3%
	→	→	→	6.3%
	→	→	→	3.1%
	→	↘	↘	1.6%
	→	↘	→	1.6%
	↗	↗	↗	3.1%
	↗	↘	→	3.1%
	→	↗	↗	1.6%
	→	↘	↗	1.6%
③	↘	→	→	1.6%
	↘	↘	↘	1.6%
	↘	↘	↘	1.6%
	↘	→	↗	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	→	↗	0.0%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	→	↗	1.6%
	↘	→	↘	0.0%
④	↘	↘	↗	1.6%
	↘	↘	↘	0.0%
	↘	↘	→	0.0%
	↘	↘	↗	0.0%

表 21：唱歌 5 拍語①

平板						
	↗	↗	→	→	6.1%	
	↗	↗	↗	↗	3.0%	
	↗	↗	↗	→	0.0%	
①	↗	↗	→	↗	0.0%	
	↗	→	↗	↗	0.0%	
	↗	→	↗	→	0.0%	
	↗	→	→	↗	0.0%	
	↗	→	→	→	0.0%	
	↗	↘	↘	↘	18.2%	
	→	↗	→	↗	6.1%	
	→	↗	→	↘	6.1%	
	→	↘	→	↘	6.1%	
	↗	↗	↗	↘	3.0%	
	↗	↗	→	↘	3.0%	
	↗	↗	↘	↘	3.0%	
	↗	→	↘	↗	3.0%	
②	↗	→	↘	↘	3.0%	
	↗	↘	→	↗	3.0%	
	↗	↘	→	→	3.0%	
	→	↗	↗	↗	3.0%	
	→	↗	↘	↘	3.0%	
	→	→	↗	↘	3.0%	
	→	→	→	↗	3.0%	
	→	→	→	↘	3.0%	
	→	→	→	↘	3.0%	
	→	↘	↗	↗	3.0%	
	→	↘	→	↗	3.0%	
	↘	↗	↗	↗	3.0%	
④	↘	↘	→	↗	3.0%	
	↘	↘	↘	↘	3.0%	

中高1						
	↗	↘	↘	→	5.6%	
	↗	↘	↘	↘	5.6%	
	↗	↘	↗	↗	0.0%	
	↗	↘	↗	→	0.0%	
	↗	↘	↗	→	0.0%	
①	↗	↘	↗	↘	0.0%	11.1%
	↗	↘	→	↗	0.0%	
	↗	↘	→	→	0.0%	
	↗	↘	→	↘	0.0%	
	↗	↘	↘	↗	0.0%	
	→	↘	↗	↘	11.1%	
	→	↘	→	↘	11.1%	
	→	↘	↘	↗	11.1%	
②	↗	→	↗	↗	5.6%	55.6%
	→	→	↗	↗	5.6%	
	→	↘	→	→	5.6%	
	→	↘	↘	↘	5.6%	
	↘	↘	↘	↗	11.1%	
③	↗	↗	↗	→	5.6%	27.8%
	→	↗	↘	↘	5.6%	
	↘	→	↘	↗	5.6%	
④	↘	↗	↗	↘	5.6%	5.6%

8.6 演歌

演歌の結果は表 23～表 26 である。アクセント全体とメロディの完全一致は 3 拍語で 24.9%、4 拍語で 22.8%、5 拍語で 15.4%、3～5 拍語全体では 22.3% となった。

表 23：演歌 3 拍語

平板				
①	↗	↗	17.0%	25.2%
	↗	→	8.1%	
②	→	→	16.3%	
	↗	↘	12.6%	49.6%
	→	↘	12.6%	
④	→	↗	8.1%	
	↘	↗	15.6%	
	↘	↘	6.7%	25.2%
	↘	→	3.0%	

中高1				
①	↗	↘	11.8%	11.8%
	→	→	22.4%	
②	→	↘	11.8%	40.0%
	↗	→	5.9%	
③	↗	↗	14.1%	
	↘	↘	10.6%	34.1%
	→	↗	7.1%	
④	↘	→	2.4%	
	↘	↗	14.1%	14.1%

尾高				
①	↗	↗	22.2%	22.2%
	↗	→	0.0%	
②	↗	↘	33.3%	
	→	↘	22.2%	66.7%
	→	→	11.1%	
④	→	↗	0.0%	
	↘	↘	11.1%	
	↘	↗	0.0%	11.1%
	↘	→	0.0%	

頭高				
①	↘	↘	16.2%	
	↘	↗	15.2%	35.2%
	↘	→	3.8%	
②	→	↗	14.3%	
	→	→	13.3%	37.1%
④	→	↘	9.5%	
	↗	↗	14.3%	
	↗	↘	9.5%	27.6%
	↗	→	3.8%	

表 24：演歌 4 拍語

平板				
①	↗	↗	↗	6.5%
	↗	↗	→	2.4%
	↗	→	→	1.6%
	↗	→	↗	0.8%
<hr/>				
②	→	→	→	9.8%
	→	↘	↗	9.8%
	↗	↘	↘	8.9%
	↗	↗	↘	7.3%
	↗	↘	↗	4.9%
	→	↗	→	4.9%
	→	→	↘	4.9%
	→	↗	↘	4.1%
	→	→	↗	4.1%
	→	↘	↘	3.3%
	→	↘	→	0.8%
	↗	→	↘	0.0%
④	↘	↘	↘	5.7%
	↘	↘	↗	4.9%
	↘	↗	↘	3.3%
	↘	→	→	3.3%
	↘	↗	→	2.4%
	↘	↗	↗	0.8%
	↘	→	↘	0.8%
	↘	→	↗	0.0%
↘	→	→	0.0%	

中高1					
①	↗	↘	↘	18.7%	
	↗	↘	→	4.0%	
	↗	↘	→	1.3%	
	→	↘	↗	12.0%	
<hr/>					
②	→	→	→	10.7%	
	→	→	↘	6.7%	
	→	↘	↘	5.3%	
	→	→	↗	2.7%	
	↗	→	→	1.3%	
	↗	→	↘	0.0%	
	→	↗	↘	0.0%	
	→	↘	→	0.0%	
	<hr/>				
	③	↘	↘	↗	8.0%
		↘	↘	↗	5.3%
		↗	↗	↗	4.0%
↗		↗	↘	4.0%	
↘		→	→	2.7%	
→		↗	↘	2.7%	
↘		→	↘	1.3%	
→		↗	→	1.3%	
④	↘	↗	→	0.0%	
	↘	→	↗	0.0%	
	↘	↘	→	0.0%	
	↘	↗	↗	2.7%	
	↘	→	→	1.3%	
	↘	↗	↘	1.3%	
	↘	↗	↗	1.3%	
	↘	→	↗	1.3%	

頭高				
①	↘	↗	↘	21.6%
	↘	↗	↗	6.8%
	↘	↗	→	5.4%
	↘	↗	↘	5.4%
	↘	↘	↗	5.4%
	↘	→	→	2.7%
	↘	→	↘	1.4%
	↘	→	↗	0.0%
<hr/>				
②	→	→	→	8.1%
	→	→	↘	4.1%
	→	→	↗	2.7%
	→	↘	↘	2.7%
	→	↘	↘	2.7%
	→	↗	↗	1.4%
	→	↗	→	1.4%
	→	↘	↗	1.4%
<hr/>				
④	↗	↘	↘	6.8%
	↗	→	→	5.4%
	↗	↗	→	4.1%
	↗	↗	↘	2.7%
	↗	→	↗	2.7%
	↗	↘	↗	2.7%
	↗	→	↘	1.4%
	↗	↗	→	0.0%
↗	↘	→	0.0%	

尾高				
①	↗	↗	↗	0.0%
	↗	↗	→	0.0%
	↗	→	↗	0.0%
	↗	→	→	0.0%
<hr/>				
②	→	↗	↘	50.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	→	↘	0.0%
	↗	↘	↗	0.0%
	↗	↘	→	0.0%
	↗	↘	↘	0.0%
	→	↗	↗	0.0%
	→	↗	→	0.0%
	→	→	↗	0.0%
	→	→	→	0.0%
	→	↘	↗	0.0%
	→	↘	↘	0.0%
④	↘	↘	↘	50.0%
	↘	↗	↗	0.0%
	↘	↗	→	0.0%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	→	↗	0.0%
	↘	→	→	0.0%

中高2				
①	↗	↗	↘	8.0%
	↗	→	↘	4.0%
	↗	↘	↘	16.0%
	→	→	→	8.0%
<hr/>				
②	→	→	↘	6.0%
	→	↗	↘	4.0%
	→	↗	→	2.0%
	→	↘	→	2.0%
	→	↘	↘	2.0%
	→	→	→	0.0%
	→	↗	→	0.0%
	→	↘	→	0.0%
<hr/>				
③	↘	↘	↘	10.0%
	↘	↘	↗	8.0%
	↘	↘	↗	6.0%
	↘	↘	↗	6.0%
	↘	↗	→	4.0%
	↘	↗	↘	4.0%
	→	↗	↗	2.0%
	→	→	↗	2.0%
<hr/>				
④	↘	→	→	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	↘	↘	0.0%
	↘	↘	↗	4.0%
	↘	↗	↗	0.0%
	↘	→	↗	0.0%
	↘	→	↘	0.0%
	↘	→	→	0.0%

表 25：演歌 5 拍語①

平板						中高1					
	↗	↗	↗	↗	7.7%		↗	↘	→	↘	3.8%
	↗	↗	→	→	2.6%		↗	↘	↘	↘	3.8%
	↗	↗	↗	→	0.0%		↗	↘	↗	↗	0.0%
	↗	↗	→	↗	0.0%		↗	↘	↗	→	0.0%
①	↗	→	↗	↗	0.0%	①	↗	↘	↗	↘	0.0%
	↗	→	↗	→	0.0%		↗	↘	→	↗	0.0%
	↗	→	→	↗	0.0%		↗	↘	→	→	0.0%
	↗	→	→	→	0.0%		↗	↘	↘	↗	0.0%
	↗	↗	↗	↘	7.7%		↗	↘	↘	→	0.0%
	↗	↗	↘	↗	7.7%		→	→	↗	↘	7.7%
	↗	↗	↘	↘	7.7%		→	↘	↘	↗	7.7%
	↗	↘	→	→	5.1%		↗	→	↗	↗	3.8%
	→	→	↗	↘	5.1%		↗	→	↘	↘	3.8%
	→	→	→	↗	5.1%	②	→	→	↗	↗	3.8%
	↗	↗	↘	→	2.6%		→	→	→	→	3.8%
②	↗	→	↘	↗	2.6%		→	→	↘	↗	3.8%
	↗	→	↘	↘	2.6%		→	↘	↗	↗	3.8%
	↗	↘	↘	↗	2.6%		↗	↗	↗	↘	7.7%
	→	↗	↗	↘	2.6%		↘	→	↗	↗	7.7%
	→	→	↗	↗	2.6%		↗	↗	→	↘	3.8%
	→	→	↗	→	2.6%	③	→	↗	↗	↘	3.8%
	→	→	↘	↘	2.6%		↘	→	→	↘	3.8%
	→	↘	↘	↘	2.6%		↘	↘	↗	↗	3.8%
	↘	↘	↘	↗	7.7%		↘	↘	↘	↗	3.8%
	↘	↗	↗	↗	2.6%	④	↘	↗	↗	↗	7.7%
	↘	↗	↗	↘	2.6%		↘	↗	↘	↘	7.7%
③	↘	↗	↘	↘	2.6%						
	↘	→	↘	↗	2.6%						
	↘	→	↘	↘	2.6%						
	↘	↘	↗	→	2.6%						
	↘	↘	↗	↘	2.6%						

第9章 考察

童謡・唱歌でアクセントのピッチ変化とメロディの音程変化に高い一致が見られる一方で、演歌はあまり高くはなく、約 30%が不一致のメロディ変化をしている。第 8 章で記した範囲の結果をまとめる。

- 童謡・唱歌を通じて、アクセント変化のある箇所での音程不一致の割合は小さい(表 27)。演歌は上昇アクセントで 24.5%、下降アクセントで 27.5%が不一致と比較的高めになっている。

表 27：童謡・唱歌・演歌のアクセント変化部一致率

	童謡		唱歌		演歌	
	上昇部	下降部	上昇部	下降部	上昇部	下降部
完全一致度	42.0%	56.4%	44.2%	53.4%	37.4%	44.4%
不一致度	11.3%	13.3%	13.3%	18.5%	24.5%	27.5%

- 音程一致している場合、メロディの側が「変化なし(同音反復)」である割合もかなりあり、完全一致の割合は必ずしも大きくはない。最も大きいもので、童謡のアクセント下降部の 56.4%である。
- アクセント変化が高→低の場合と低→高の場合を比べると、前者のほうが不一致の割合は小さく、完全一致の割合も大きい
- アクセント変化のない場合、○○（高高）の場合はメロディの音程変化が均等に分布する傾向が見られる。ただし、童謡と比べると唱歌の場合には必ずしも顕著ではない。●●（低低）の場合には分布は均等ではなく、メロディが下降する割合が大きくなっている。

第 9 章では、アクセント型全体でのメロディ変化の調査を行った。第 9 章での結果をまとめる。

- 完全一致の割合は、童謡が最も高く、次いで唱歌、演歌の順となった。
- 完全一致の割合はあまり高くないが、不完全一致と合わせた割合は比較的高い。中高型でも 70%程あることからアクセント変化部をきっちり守り、変化の無い部分でメロディに自由さを出しえいることが考えられる。
- 童謡・唱歌・演歌全てのアクセント型を通して、頭高型は 2 拍目以降も下降のメロディが続く傾向にある。しかし、5 拍語のみいゝと最後の拍で音高が上がるメロディの割合が多い。

8、9 章の結果として、アクセント変化のある箇所での音程不一致の割合は低く、変化のない箇所ではメロディが自由に動きうることから、歌詞の音韻の高低とマッチした、その意味では自然で歌いやすいメロディが付されていると考えられる。アクセント型全体でアクセントに忠実なメロディを作る場合、2 拍目以降の制約が無い頭高型以外は制約が多くなる。そのため、アクセント変化部は忠実に守り、変化のない箇所ではメロディを自由につけた不完全一致の割合が多い。

また、童謡・唱歌・演歌の全てで、アクセントの上昇部より下降部の方が一致度は高いが、

これは、東京式アクセントでは上昇アクセントに比べて下降アクセントが重視される傾向があることがメロディへと反映されているのだと考えた。

完全一致の割合は童謡が最も高く、唱歌、演歌の順で低くなっていくことから、その楽曲を親しむ年齢層や楽曲の意味合いもアクセントの反映に関係すると考えられる。童謡と唱歌ではアクセントの一致が高いが、演歌で低くなるのは、童謡と唱歌が教育音楽の部類であり、演歌が大衆音楽であるのも関係しているだろう。

ただし、分析方法について見直しの余地がある。本研究では、1 拍到複数の音符が割り当てられている場合、2 音目以降は分析から外し、1 拍につき 1 音符として調査を行った。しかし、先行研究で述べたように、金田一によれば、アクセントが高→低の場合にメロディが低→高となると不一致であるが間に高い音を挟めば 2・3 音目の間では高→低となり、不一致を解消しうるとされている。演歌のような大衆音楽の場合、このようなテクニックでアクセントの不一致を解消したメロディが多く存在するだろう。本研究ではそのような場合は考慮していないため、一概に演歌の一致度が低いとも言えず、更なる調査が必要である。

第10章 今後の課題

童謡・唱歌・演歌の調査を行ったが、6拍語以上のアクセント型の数が少なく、調査の不足を感じた。また、助詞も含むという条件で調査を行ったため、尾高型の数が少なく、助詞を含まない場合の調査も必要であると感じる。本研究で扱ったデータは歌詞の1番部分だけであったが、2番以降で歌詞に応じてメロディが変えられている場合もある。そのため、2番以降と比較しての調査も取り入れ、

今後の課題として、楽曲数を増やし語数を増やしていくほか、作曲年代別の調査も行うことや、J-POP など別のジャンルの調査も同じように分析することで、ジャンルごとのアクセントとの一致度やアクセント型の特徴を調査することが挙げられる。

謝辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々にご協力をいただきました。ご指導くださった平賀先生をはじめ、平賀研究室の皆さま、また、お忙しい中貴重な資料を送ってくださった村尾忠廣先生に心から感謝申し上げます。

参考文献

1. 金田一春彦, 秋永一枝.: 新明解日本語アクセント辞典 第2版、三省堂、(2014)
2. 小川芳男・林大・他編集: 縮刷版 日本語教育辞典、大修館書店、(1987)
3. Wikipedia「アクセント」、
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%83%88>(2015年1月現在)
4. 小泉文夫: 歌謡曲の構造、冬樹社、pp156-161、(1984)
5. 金田一春彦: 日本語音韻の研究、東京堂出版、(1967)
6. 高木徹: 歌謡曲における歌詞のアクセントと旋律の関係―「雨」と「霧」を例にして―、言語文化研究(中部大学女子短期大学紀要)、(1991)
7. 成美堂出版編集部(編): 懐かしい童謡唱歌と新童謡、成美堂出版、(2011)
8. 松山祐士 編: 演歌名曲大全集、ドレミ楽譜出版社、(2013)
9. 日本シンセサイザープログラマー協会(JSPA): ミュージッククリエイターハンドブック MIDI 検定公式ガイド、ヤマハミュージックメディア、(2012)
10. 齊藤陽子、佐久間尚子、石井賢二、水澤英洋: 歌の認知における詞とメロディの役割- 歌の認知はなぜ速いのか? -, 心理学研究 80(5)、pp405-413、(2009)
11. 中山一郎: 日本語を歌・唄・謡う、日本音響学会誌 59(11)、pp688-693、(2003)
12. 上笙一郎: 日本童謡辞典、東京堂出版、(2005)